

米国の東アジア政策形成の源流

—— 20世紀初頭における東アジア政策形成のトリオ ——

谷 光 太 郎

- (1) はじめに
- (2) セオドア・ルーズベルト大統領
- (3) ヘンリー・キャボット・ロッジ上院議員
- (4) アルフレッド・T・マハン海軍大佐
- (5) ルーズベルト・ロッジ・マハンのトリオ
- (6) ルーズベルトとハワイ・フィリピン領有問題
- (7) ルーズベルトとシナ, 日本問題
- (8) おわりに

(1) はじめに

米国の歴史は西へ向かって進む歴史であった。1620年、英国清教徒の102人が大西洋を横断し、北米東岸のプリマスに上陸した。米国史の始祖である。

160年後の1783年、英国と戦って独立した。1803年、ミシシッピー川流域の広大なルイジアナをフランスから購入。1819年にはフロリダをスペインより買収。1845年にはメキシコ領だったテキサスを併合し、これに怒ったメキシコと戦争をして1848年にはアリゾナ、ネバダ、カリフォルニアといった地方を割譲させた。独立後、50年にしてアングロサクソン系を中心とする勢力が太平洋岸に達した。1848年、カリフォルニアで金鉱が発見された。いわゆ

るゴールドラッシュが起って、ここに多くの人々が流れ込んでいった。

原住民の土地を奪って西へ西へと進出することは、アングロサクソン系住民を中心とする米国白人が神から与えられた「明白なる運命＝マニフェスト・デスティニー (Manifest Destiny)」¹⁾と彼等は考えた。

メキシコと戦ってカリフォルニアなどを奪うのも、マニフェスト・デスティニーであった。

西へ西へと進んでいった米国人（特に断らない限りアングロサクソン系を中心とする英語を喋る白人で、原住民、黒人、黄色人は含まない。）のエネルギーは、太平洋岸に到っても止まらなかった。

歴史家フレデリック・J・ターナーは、広大なフロンティアの存在を米国史の特色と考え、フロンティアの消滅をもって米国史の第一期は終わり、第二期を「海のフロンティアへの膨張—太平洋をさらに西へ進み海外市場を求めること—と考えていた。²⁾」

歴史家ブルックス・アダムスやアルフレッド・T・マハン海軍大佐といった言論界で大きな影響力を持つ人々もこのような考えをもっていた。

マハンは次のように考えた。

「欲すると否とに拘らず、米国民は今や目を外に向けなければならない。米国の発展する生産力はそれを要求している。次第に増大する国民感情はそれを要求している。ふたつの旧世界、ふたつの大洋にはさまれた米国の位置がそれを要求している³⁾」

工業生産は1860年の19億ドルが30年後には5倍の93億7000万ドルとなり、1880年代に英国を抜いて世界一の工業国となった。1860年代から80年代にか

1) John L. O'Sullivan が *United States Magazine and Democratic Review* 1845. July-August に載せた—the fulfillment of our manifest destiny to over the continent allotted by Providence—というのがマニフェスト・デスティニーという言葉の最初。

2) *The Frontier in American History*, Frederic J. Turner, 1920, p. 38

「岩波講座世界史22近代(9)」岩波書店 1974年, p. 248

3) *The Interest of America in Sea Power*. Alfred T. Mahan, 1897, pp.21-22

「岩波講座世界歴史22近代(9)」前出p. 259

け1千万人の移民（主として東欧、南欧から）が流入した⁴⁾。

マハン は政治問題、外交問題に関してジャーナリズムの世界で華々しく活躍した。その考えは、マニフェスト・デスティニーの海洋帝国版とも考えられる。

米国民の各層から海外市場への進出を求める声広がった。それは宗教や文明上の使命感、通商拡大の要求、軍事戦略拠点の確保といった種々の視点からの要望であり、かつてのマニフェスト・デスティニーとよく似ていた。米国史の第一期が大陸を西進し、陸の大国への道であったとすれば、米国史の第二期は、太平洋を西進して、海の大国への歩みと行ってもよかった⁵⁾。

この米国史の第一期から第二期への転換の時期、すなわち1890年代から1900年代の約20年間、この転換を大きくリードした人々にセオドア・ルーズベルト大統領を囲む人々がいた。これらの人々は、特に東アジアに強い関心をもっていた。現在（1996年）東アジアの政治、外交、軍事、通商の問題は、米国抜きには考えられない。

米国の東アジアへの進出と東アジア政策を創設してきたセオドア・ルーズベルトを囲む人々の考えを知ることは、現在の米国の東アジア政策を知る基本である。

本編では、セオドア・ルーズベルトを中心に、アルフレッド・T・マハン、ヘンリー・C・ロッジの3人にスポットをあて、彼等の人間像、思想を明らかにし、併せて彼等の東アジア政策について考察する。

ルーズベルト (Theodore Roosevelt 1858-1919) は大統領を二期 (1901-1909) 勤めた政治家で日露戦争講和斡旋によりノーベル平和賞を受賞している。第二次大戦中の大統領フランクリン・D・ルーズベルトは一族である。

マハン (Alfred Thayer Mahan 1840-1914) は異色の海軍士官で、多くの著作により、米国外交に大きな影響を与えた。特にその著「権上権力史論 (The

4) 「岩波講座世界歴史22近代(9)」前出 p.259

5) 「近代のアメリカ大陸—ビジュアル版世界の歴史(15)—」清水知久、講談社 1991年, pp.222-223

Influence of Sea Power Upon History 1660-1783), 1890年出版」は、英、独、日といった海軍列強に強い影響力があった。

ロッジ (Henry Cabot Lodge, 1850-1924) は曾祖父、祖父が大統領というボストンの名家に生れ、上院議員を32年間勤めた共和党の大物政治家。多くの著作、評論がある。

3人は政治信条を同じくする共和党員で、大統領、上院議員、軍人ジャーナリストの立場で協力しつつ米国の東アジア方面への進出政策の実現を図った。いずれもペンの人で、歴史に関心が深く歴史書や歴史上の人物伝記を書き、政治、外交関連の論文を書いている。膨大な手紙 (いずれも浩瀚な書簡集がある) を書き、自叙伝を書いているのも三人に共通している⁶⁾。

3人はしばしば会合したり、書簡で意見の交換をした。ルーズベルトはマハンとロッジから大きな影響を受けた。(詳細は後述)

米国の大統領は任期制のある専制帝王といわれるくらい強力な権限を持っている。

しかも、ルーズベルトの場合、議会では与党が圧倒的多数であった。上院では24議席、下院では100議席共和党が民主党を上まわっていた⁷⁾。

42歳の若さで大統領となり、精力溢れるルーズベルトは自らに恃む所が強い。自分で決め、自分で行動するタイプである。

この時代の米国の外交政策の理解にはルーズベルトの性格を抜きに考えられない。

6) 書簡集に関しては次のものがある。

The Letters of Theodore Roosevelt 8 vols. edited by Elting E. Morrison and John Blum. Harvard University Press, 1951-1954

Letters and Papers of Alfred Thayer Mahan, 3 vols. edited by Robert Seager II and Doris D. Marguire, Naval Institute Press, 1975

Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge 1884-1918. edited by Henry Cabot Lodge, Scribner's, 1925

自叙伝には次のものがある。

An Autobiography, Theodore Roosevelt, New York, 1920

From Sail to Steam, Alfred Thayer Mahan, Harper & Brothers Publishers, 1907

Early Memories, Henry Cabot Lodge, New York, 1913

7) *The Rise of Theodore Roosevelt*, Edmund Morris, Ballantine Books, 1979, p.14

また、ルーズベルトに強い影響を与えた、ロッジ、マハンの二人も自己顕示欲と個性の強い人物である。ルーズベルトについてはその人間的側面から、ロッジとマハンに関しては人間的側面と思想的側面からの考察を行い、続いてルーズベルトのアジア政策に関する分析を行う。

(2) セオドア・ルーズベルト大統領

セオドア・ルーズベルトは1858年ニューヨーク市で生れた。日本風にいえば安政5年、日米修好通商条約が結ばれ、いわゆる安政の大獄が始まった年である。ちなみに、ルーズベルト（以下、ルーズベルトと記す場合には1901年より1909年まで大統領たりしセオドア・ルーズベルトを指す）が死んだのは第一次大戦が終結した翌年の1919年。ルーズベルトの父も自分の長男もセオドアと称した。即ち、3代セオドアが続いた。普通、ルーズベルト本人はそのままで、父、長男にはそれぞれ、シニア、ジュニアをつけて呼ぶ。ジュニアは、1921年のワシントン海軍軍縮会議当時、海軍次官として米海軍をとりまとめた人物だ。

セオドアとはギリシャ語の「神からの授かりもの」の意味でヘブライ語のドロシーと同語源。キリスト教の聖人の名前に散見されるが、英米で男子の名前として現れるのは17世紀頃からで、それでも珍しかった。1850年代から多くなり、ルーズベルトが大統領になってから急増した⁸⁾。

ルーズベルト家の先祖は、1649年にオランダからニューヨーク（当時はニューアムステルダム）に移住したクラエス・ローゼンベルト（Klaes Martenszen van Rosenvelt）といわれる。

「ローゼンベルト」とは「バラの野」を意味するオランダ語。米国で生まれたクラエスの息子ニコラスは苗字を米国風にルーズベルトと改めた。ニコラ

8) *American Given Names*, George R. Stewart. Oxford University Press, 1979, p.242

スの息子の代に二系流の分れた。一方はニューヨーク市マンハッタン島に本拠を置く流れで、他方は、ハドソン川上流のハドソン溪谷地帯に本拠を置く流れである。前者から共和党大統領のセオドアが出、後者から民主党大統領(1933-1945)のフランクリンが出た。後に両家は両大統領の自宅の地の名称からオイスター・ベイ・ルーズベルト家、ハイド・パーク・ルーズベルト家とも呼ばれるようになった。セオドアとフランクリンはともに両家の嫡男。フランクリンの妻エレノアはセオドアの2つ年下の弟エリオットの長女である。

ルーズベルトは始祖から教えて7代目で、それまでの先祖は全てマンハッタン島でうまれていた。父の代からオランダ系以外の血が混じった。祖母が、ウェズル人、イングランド人、スコットランド人、アイルランド人、ドイツ人の血を継いでいたからだ。この祖父母のオランダ語の子守歌を聞いて幼いルーズベルトは育った。祖父は貨殖の才があり、一代で50万ドルの資産を築いた。一般男子の日給が50から75セントの時代である。

父も欧州からのガラス輸入や銀行業に手を染めた。頑健な身体を持つ精神的活動家で、壮年以降はニューヨーク市の事前事業に尽力があった。

母マーサはジョージア州の名家で、大農業主であったバロック家の出。1729年にスコットランドのグラスゴーからチャールストンに移住したジェームス・バロックが母方の始祖である。以降、一族はフランス系のユグノーの家系と混わり、スコットランド人とフランス人の混血の家系となっていた⁹⁾。

9) セオドア・ルーズベルト家の家系については *The Rise of Theodore Roosevelt*, pp.36-37, p.760, なお、フランクリン・ルーズベルトの家系については、*FDR-A Biography*, Ted Morgan, Grafton Books, 1985, pp.24-33

本論文のルーズベルトの生い立ちについては *The Rise of Theodore Roosevelt* によるところが大きい。その他、次の二書も利用した。

Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power, Howark K. Beale, The Johns Hopkins University Press, 1956

Theodore Roosevelt, Henry F. Pringle, Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1931

前書はルーズベルトの思想の理解に、後書はルーズベルトの生涯全体の把握に有益である。なお、ヘンリー・ロッジとアルフレッド・マハンに関しては主として次の二書を参考にした。

Henry Cabot Lodge and the Search for an American Foreign Policy, William C. Winde-
nor, University of California Press, 1980

Alfred Thayer Mahan-The Man and His Letters-, Robert Seager II, Naval Institute Press, 1977

マハンに関しては拙著「アルフレッド・マハン」白桃書房 1990年がある。

ルーズベルトが海軍に深い関心を持つようになったのは母からの影響だった。母は幼いルーズベルトに毎日のように船や軍艦の話をして聞かせ、これが幼い心に深くしみ込んでいった。ハーバード大学時代に指導教官はルーズベルトが数学とか言語学方面の学問の道を進むのではないかと思ったが、青年ルーズベルトの心の中は海上で戦う軍艦で一杯となり「1812年の海戦」の執筆にエネルギーを傾ける青年になっていた¹⁰⁾。

母の兄のジェームスは米海軍士官で、ファラガット提督に仕えたこともある。南北戦争時は南軍海軍に入って戦った。母の弟のアービンも南北戦争が勃発するや、学業を抛って南軍海軍に身を投じた。母はこの兄や弟の華々しい活躍を幼いルーズベルトに話したのだ。

南北戦争が始まった年（1861年4月）ルーズベルトは三歳。この戦争は多くの人々に南につくか北につくか、という決断を迫らせた。父はニューヨークの出だが、母は多くの奴隷を所有している南部の大農場主の出だ。父は当時の資産家の多くがそうしたように、代理人を傭って徴兵を避けた。軍服を着て戦場に出ることはなかった。何よりも男らしさと勇気を貴び、後には、闘う男を讃え、「全ての資質の中で最も価値あるものは軍人の美質だ」「偉大で美事な民族は例外なく戦う民族だった¹¹⁾」と考えるようなルーズベルトにとって、父が軍服と着なかったことは大きな罪の意識に残った。

これはルーズベルトが米西戦争時、海軍次官という高官にもかかわらず義勇騎兵隊を創設して、狂ったように戦場に出ることを望み、且つ戦場に臨ませる原因となったと考える人は多い¹²⁾。

少年時病弱だったルーズベルトは強い意志力で体力づくりに励んだ。父は

10) *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.565, *The Letters of Theodore Roosevelt*, p.599, *An Autobiography*, p.12

11) *Theodore Roosevelt*, p.11, *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, p. 5, *The Rise of Theodore Roosevelt*, pp.569-871, 1897年6月2日海軍大学校での演説 *Works*, edited Hermann Hagedorn, National Edition, 20 vols. Scribner's 1926, vol.13, pp.182-199

12) *The Rise of Theodore Roosevelt*, pp.38-40

息子達のために自宅の2階に運動部屋を作った。生まれつき目も弱く、大統領2期の後半の1908年頃から左目は見えなくなっていたといわれる¹³⁾。

学校には行かず、家庭教師から学んだ。

きょうだいは4人で、姉妹と弟がいた。

2歳年下のエリオットからの影響も大きかった。エリオットは運動神経抜群の熱血漢タイプで、ボート、拳闘、乗馬、狩猟、射撃にエネルギーを注いだ。幼少時には年の離れた姉を除いた、3人きょうだいのリーダー格はこの弟のエリオットだった。ルーズベルトはこの弟をうらやましく思い、弟のやることには負けまいと拳闘、乗馬、射撃などに熱中した¹⁴⁾。

ルーズベルトには弱さを克服して、強さと男らしさへ向かう情熱とあこがれが顕著で、これを意思力によって実現しようとする傾向が強かった。

ルーズベルトが最も好んだ言葉は「男らしい (Manly)」だった¹⁵⁾。

貧弱な身体と健康の弱さを克服しようと、拳闘や乗馬に打ち込んだ。後年、新婚早々の妻と母を伝染病で一夜にして失った時は、女々しい態度をとるのを潔しとせず、西部のダコタ（当時は未だ正式に州となっていない）に移って、カウボーイ生活と狩猟に明け暮れた。コルト・レボルバー45口径を腰に、ウインチェスター銃を鞍において、一日100マイルを馬で動いた。5頭の馬を取り替えて40時間以上馬上で過ごしたこともある。47日間山中で過し、大鹿、熊を狩った。この時は馬で1,000マイルを踏破した。

決闘で2人を殺し、境界争いで殺人を疑われている土地の有力者から決闘を申し込まれたこともある。

ルーズベルト家は欧州との縁が深く、しばしば長期間にわたって欧州を旅行した。

ルーズベルトは幼年よりぜんそく持ちで、学校には行かず、家庭教師に学んだ。

11歳と15歳の時、家族全員で、1年間にわたって欧州を旅行した。中近東

13) *Theodore Roosevelt*, pp.11-13

14) *ibid.*, p.9, *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, p.4

15) *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.273

やエジプトにもいった。この第2回目の欧州旅行の時には9ヶ月間ドレスデンで過ごし、ドイツ語を習った。

欧州旅行から帰国すると、ハーバード大学への入学試験受験にとりかかった。1867年秋入学。大学時代のクラスメートに日本からの留学生金子堅太郎がいた。

ハーバード卒業は1880年6月。この大学時代の収穫は友人の紹介でアリス・H・リーと知り合ったことと、歴史の面白さを知ったことだった。特に後者に関しては1812年戦争に関する適切な歴史書がないことを知り、これを書くことを決心した。大学時代に構想を練って、2章分は書き上げて卒業した。

卒業の年の秋、19歳のアリスと結婚し、ニューヨークの共和党支部に入った。それ程深い気持ちでもなく気まぐれで入ったといってもよかった¹⁶⁾。一族には民主党員が多かった。後に大統領となる一族のフランクリン・ルーズベルトも民主党である。

翌年の春、アリスと欧州へ渡り、夏はスイスで過ごし、9月に帰国してみると、ニューヨーク州下院議員の共和党候補者にされていた。11月の選挙で当選した。これが、ルーズベルトの政治歴の一步である。

1880年から81年の新婚の冬には、大学時代に一部書きためていた「1812年の海戦 (The Naval War of 1812)」の完成のための執筆にあて、欧州旅行中にも推敲を重ねた。出版されるのは1882年。

1884年2月、ニューヨーク州下院議員としてアルバーニに住んでいたルーズベルトに電報が届いた。女兒を出産した直後の妻と母マーサがチフスで危篤の知らせである。

一夜にして母 (50歳) と妻 (22歳) を失う悲劇がルーズベルトを襲った。

この年の6月、大統領候補を選ぶ共和党全国大会がシカゴで開催された。代議員となってシカゴへ向かう車内で同じとなったのが、マサチューセッツ州代議員のヘンリー・C・ロッジ。34歳のボストンっ子のロッジの長身、無

16) *Theodore Roosevelt*, pp.32-33

口、冷淡、傲慢に対し、25歳のニューヨークっ子のルーズベルトは、中背、快活、多弁である。性格は陰と陽だが、忽ち意気投合し¹⁷⁾、2人は生涯の刎頸の友となる。

ロッジとルーズベルトは全国大会で大統領候補にエドモンドを推すが破れて、ブレインと決った。

母と新妻を失い、しかも共和党全国大会でも破れた傷心のルーズベルトはニューヨークに返らず、そのまま西部に向かった。前年入手していた牧場でこの秋を過すためだ。

何よりも「男らしさ」を好むルーズベルトは傷心の自分を、大平原や山中の大自然の中で鍛え治そうとした。単身、47日間山中を1,000マイル踏破して、大鹿や熊や野鳥を撃った。長い孤独の馬上の旅で、零下20度にもなる夜を山中で過した。

晩秋にニューヨークに帰り、一冬かけて、狩猟の旅のことを一気に書き上げた。この、「狩猟の旅 (Hunting Trip)」は、1885年に出版された。

前著の「1812年の海戦」が学術的で数量データの多い、硬いものであったのに比べ、「狩猟の旅」は、叙情的、感傷的、感覚的なものである。いずれも好評で版を重ねた。

ルーズベルトは生来のペンの人であった。次々と本を書き、手紙を書いた。生涯に38冊の本を出版し、数多くの論文や評論を書き、手紙は残っているのだけでも15万通にのぼる¹⁸⁾。

1885年の秋、ルーズベルトはニューヨークに4つ違いの妹コニーの親友で、子供時代に一緒によく遊んだエジス・キャローを訪れた。エジスはコニーと二人でハーバード大学にいたルーズベルトに会いに来たこともある。エジスは老嬢と言われ始める24歳になっていた。翌1886年の春には西部へ行き、牧場で毎朝西部開拓に尽力のあった、トーマス・H・ベントン上院議員の伝記を書いた。7月にニューヨークに帰って脱稿の原稿を出版社に渡し、その足

17) *ibid.*, p.62, *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.256, pp.258-259

18) *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.48, p.154

で西部に向かい9月一杯は、西部の山中で夜営を続けて猟をした。10月、ニューヨークに帰ると、共和党の市長選候補にされる。この時の共和党大会の議長は、「西部ダコタのカウボーイを次のニューヨークの市長にしよう！」と叫んだ。28歳の若者は落選する。11月、欧州に行き、年末にロンドンでエジスと結婚した。

翌1887年の3月にエジスとともに帰国。直ちに西部の牧場に向った。ルーズベルトがエジスと再婚して欧州で過ごした冬は、ルーズベルトの牧場にとって記録破りの寒波が到来した冬だった。3,000頭の牛が死に、父の遺産の半分の8万ドルの投資の半分を失った。

この損失のため、ルーズベルトの牧場経営の意欲は失われてゆく。失ったものは大きかったが、この西部の大地と自然の生活のよって傷心が癒されたのである。後に彼は「(西部の) ノース・ダコタでの生活がなければ、大統領には決してなれなかつたらう¹⁹⁾」と書いている。

夏にはニューヨークに帰って「ガバナー・モリス伝」を書いた。晩秋には再び西部に行き、山野に入って狩猟をした。

初めて西部の来た頃と比べると大鹿や野鳥が少なくなり、野牛を見かけなくなった。白人の銃のせいだ。

年末にニューヨークに帰ると、知人とはかって、西部開拓史のヒーローの名をつけた「ブーン・&・クロケット・クラブ」という自然観察や自然保護のための本や会誌を発行する親睦クラブを作った。この種のクラブでは世界で初めてのものである。現在ノース・ダコタのルーズベルトの2つの牧場は「セオドア・ルーズベルト記念国立公園」になっている。

1888年には雑誌に「西部の牧場生活シリーズ」を6回にわたり執筆し、年末にはこれが単行本として出版された。それ以外に高級評論誌に二編の政治論文を書いた。5月には「ガバナー・モリス伝」が出版された。

また、5月には「西部開拓史 (The Winning of the West) 執筆もはじめ、クリスマス前に脱稿した。

19) *ibid.*, p.374

その間、共和党大統領候補のベンジャミン・ハリソンの応援演説にイリノイ、ミシガン、ミネソタと巡った。ハリソンが大統領に当選すると、下院議員となっていたロッジはジェームス・G・ブレイン新国務長官に、次官にルーズベルトを任命するよう推薦して断られている。ブレインによると、ルーズベルトには「待てしばし」がなく、「次官に必要な辛抱強さに欠け、余りにも早く行動してすまう危険がある」²⁰⁾というのだ。

ロッジはハリソン大統領に直接かけ合い、ルーズベルトのため、行政監視委員 (Civil Service Commissioner のポストを見つけた。年俸は3,500ドル²¹⁾。

この年、米国は建国100周年を祝い、ルーズベルトは30歳。

長々とルーズベルトの育い立ちを書いたのは、ルーズベルトの人となりを知るためである。財産家に生れ、若くして人から担ぎ上げられる資質を持っていたこと以外に、次の2点を特に強調しておきたい。

第一に、かれは何よりも「男らしさ」を好む意思の人であったことだ。幼い頃、弟と妹との3人で遊ぶ時、リーダーがいつも2つ年下の弟だった。スポーツマンの弟に負けまいとスポーツに励んだ。病弱でいつも熱を出し、眼の悪い彼は、父親が作ってくれたジムで体力づくりに日々を過した。父が南北戦争時軍服を着なかったことを恥じた彼は、米西戦争時には、ヒステリックに危険な戦場へ行くことを望んだ。海軍次官という高官のポストを抛って、一陸軍中佐となり義勇騎馬隊を率いた。「全ての資質の中で最も価値あるものは軍人としての美質だ」²²⁾と考えた。

新妻と母を一擲にうしなった時は、荒々しいカウボーイの群に加わり、大自然の山野で一人孤独の狩猟生活を送った。

熱血漢の男エリオットは兄とよく似た所があり、インドで虎狩りを大々的にやったり、テキサスで騎兵隊に入ってインディアンと戦ったりした。

しかし、少しのつまずきで、毎日浴びるように酒を飲むようになり、生命が危くなる程の重症のアルコール中毒となった。妻に暴力を振るうことが重

20) *ibid.*, p.392

21) *ibid.*, pp.392-393

22) *Theodore Roosevelt*, p.11

なり召使い女に手を出した。ルーズベルトはこの件で莫大な金を使っている。障害を意思力で克服して行ったのが兄であり、あり余る能力を生かし切れず身を崩していったのが弟だった²³⁾。

第2に、ルーズベルトがペンの人だったことだ。「1812年の海戦」は、数校の大学でテキストになった。海軍大学校の初代校長のルース提督も高く評価した。「狩猟旅行」も、米国での狩のテキストになった。

「西部開拓史」は、当時の著名歴史家フレデリック・J・ターナーの絶賛を浴びている。ルーズベルトの感受性の強さは「狩猟旅行」の自然の美しさの表現等によく表れているが、世界初の自然保護クラブを創っていることでも知られよう。

(3) ヘンリー・キャボット・ロッジ上院議員

ロッジは1850年の年、ボストンの名家に生れた。同じボストンの名家であるアダムズ家との閨閥により、曾祖父と祖父は大統領のいう毛並みの良さだ²⁴⁾。

アダムズ家は、ジョン・アダムスがワシントンにつぐ第2代目大統領となり、その長男ジョン・クインシー・アダムズも、駐露、駐英公使を経て国務長官となり、第6代大統領となった。ジョン・クインシーの息子チャールス・フランシスも駐英公使や上院議員、下院議員を歴任した。チャールス・フランシスには四人の子供があり、長男は法律家、次男（チャールス・フランシス・ジュニア）はユニオン・パシフィック鉄道の社長となった。鉄道経営のオーソリテイといわれた。3男のヘンリー・アダムズ（Henry Adams 1838-1918）はハーバードで歴史学を講じたこともあり、著名な歴史家。大著「米国史（History of United States from 1801 to 1817, 9 vols., 1889-1891）」

23) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, p.4

24) *Henry Cabrt Lodge and the Search for an American Foreign Policy*, p.1

や多くの著作があり、長らく高級誌「北米評論 (The North American Review) の編集長であった。

四男ブルークス・アダムス (Brooks Adams 1848—1927) も兄ヘンリーと同様歴史家。財産家に生れたブルークスはしばしば欧州、中近東、インドを歴訪した。

「文明と頽廢の原理 (Law of Civilization and Decay), 1895」「アメリカの経済的優位 (America's Economic Supremacy), 1900」「社会革命の理論 (The Theory of Social Revolution), 1913」などの著書があって、これらはルーズベルト大統領に大きな影響を与えたことは後述する。ロッジの妻ナニーの妹エブリン・デービスが1889年ブルークスと結婚したことにより、ブルークスはロッジの義弟となった²⁵⁾。

前述したアダムス家の人々は全てハーバードの卒業だ。

ロッジやルーズベルトの思想と考える場合このヘンリーとブルークスの両兄弟を抜きに考えられないほど、大きな影響を与えている。ハーバード時代からロッジの後見人的存在はヘンリー・アダムスだった²⁶⁾。

大学を卒業した年の1872年、将来の進路を迷ったロッジは恩師のヘンリー・アダムスに相談する。アダムスは「バンクcroftやパークマンのような歴史文学 (historico-literary) 方面へ進んではどうか」と奨めた²⁷⁾。

1876年、ハーバード大学は政治学関連で初めて博士号を3名に授与した。そのうちの1人は26歳のロッジである。

アダムスはロッジをハーバードの歴史学の教授にしたかったのだが、肝心のロッジはアカデミズムの世界には魅力を感じなかった²⁸⁾。

恩師アダムスの「北米評論」の編集に携っているうちに、政治の世界に魅かれる。マサチューセッツの州議会の議員となり、1882年から6年間連邦議会下院議員をつとめ、1893年から死の直前の1924年まで、32年間上院議員であった。

25) *ibid.*, p.93

26) *ibid.*, p.4

27) *ibid.*, p.11

28) *ibid.*, p.1

ロッジにとって12歳年上の恩師アダムスは厳しい師であった。

アダムスの基本思想の第一は、米国の歴史は国の原理・原則の成長と発展の歴史であり、その原理・原則とはボストンの倫理であり、ニューイングランド地方の文明であり、プリマウスに到いたメイフラワー号の民主主義であった。これはロッジにすんなりと受け入れられた²⁹⁾。

基本思想の第二は、歴史から学ぶ教訓の大切さと、国際関係の特別の重要性だった。歴史は人類にとって最も信頼できる教師だ。また、アダムスは南北戦争時外交官の父に従って欧州各地に住み、国際関係の重要性を理解していた³⁰⁾。

もちろん、ロッジが師の考えに全く一致していたわけではない。師は生涯、文筆家、歴史家、評論家、傍観者の立場にあったのに対し、ロッジは政治の泥海に入った人だ。

ロッジとアダムスは正反対だった、という人もいる³¹⁾。

アダムスがやや神秘的、懐疑的、問答的であるのに対し、ロッジは常識のセンスと経験を重視し、人の心を推測しようというやり方はとらない。

世代間の相異という人もいる。

「ロッジが少し早く生れていたらヘンリー・ジェームズのように、自国の文化の源流を尋ねるために外国へ行ったり、ヘンリー・アダムスのように、母国に留って世界の行く末を心配しただろう。もう少し遅れて生れていたら、セオドア・ルーズベルトのように米国を荒々しく生長する国として受け入れたらだろう。ロッジの最も親しい友がヘンリー・アダムスとセオドア・ルーズベルトであったことはまぎれもない事実だ。ロッジは心情的にヘンリー・アダムスの世界に属し、行動としてはセオドア・ルーズベルトの米国を受け入れた³²⁾」

ロッジはヘンリー・アダムスより12歳若く、ルーズベルトより8歳年上。それぞれほぼ10歳の年齢差である。

29) *ibid.*, p.8

30) *ibid.*, pp.11-12

31) *ibid.*, p.12

32) *ibid.*, pp.12-13

ロッジはカーライルを愛読した。そのことがロッジの歴史における偉大な人物の役割の強調に繋がったのかも知れない。自身でも、「政策に関わる個人の資質や力量が歴史を作り、国の運命を決める³³⁾」と書いたが、次のようにもその行き過ぎをたしなめている。

「歴史上のロマンチックなこと、絵のような美しいこと、個人的悲劇といったことは我々の想像を強く刺激するのだが、一般には本当に影響するものではない³⁴⁾」

ロッジにとってアダムス兄弟の兄ヘンリーは恩師であり、弟ブルークスは義弟である。この兄弟の運命論的考え、——文化・文明に関してはヘンリー、経済・通商に関してはブルークスにロッジはなじめなかった。個人のヒーローの役割に言及しないからだ³⁵⁾。

人間は印象や感情に大きく支配される。このようなことがジョージ・ワシントンのような偉大なリーダーを生んだのだ、とロッジは考える。ロッジは世界を動かすのは経済的な力ではなく、道徳の力や感情である、と信じたかったタイプの人であった³⁶⁾。運命主義、歴史の必然主義の見方と、理想主義的見方の相違である。

ロッジが影響を強く受けた歴史家は師のアダムス以外にはパークマン (Francis Parkman)、マッカレー (Thomas Bakington Macaulay) がいる。パークマンはボストン歴史学派の頂点の人であり、歴史学が科学へと転換し始めた時期の最後の浪漫派であった。時流から孤立した、禁欲的、貴族的、芸術的歴史家である³⁷⁾。

パークマンの禁欲主義と勇氣はロッジの世代に影響が大きかった。ロッジをよく知る親族の一人は、「(ロッジは) パークマンを自分のモデルにしようとしてまで傾倒していた³⁸⁾」といている。

33) *ibid.*, p.13

34) *ibid.*, p.13

35) *ibid.*, p.13

36) *ibid.*, p.14

37) *ibid.*, p.14

38) *ibid.*, p.14

アダムスがロッジに歴史研究の手ほどきと基礎を与えたとすると、パークマンは、新しく出現しつつあった「経済重視派」への疑問、即ち、彼等は米国の歴史を何も知らないではないか、という視点を与えたともいえる。

ロッジの基本的歴史観は、このパークマンの流れをくむ浪漫派で、歴史をモラルのドラマとして見たり、進歩的力（プロテスタンティズム、共和主義、ナショナリズム）とその対抗勢力（カトリック、君主制、国際派（universalist））の抗争史と見る見方であった³⁹⁾。

パークマンは国の個性は一時的なものではないと説く。全ての国は個性を持ち、国家機構は国の発展段階からの個性を反映している。人の個性と同様、根底から変ることなどできない。民族の個性や魂は何百年にもわたる闘争や抗争の産物であってユニークなものだ⁴⁰⁾。

ロッジにとっても、民族とその背負ってきた歴史は決定的なものである。国家間の個性の相異というのは消すことのできぬものだ。民族と歴史が国家の個性を重要なものとする⁴¹⁾。

ダーウィン（Charles R. Darwin 1809—1882）の生物の進化、特に生存競争における適者生存と自然淘汰を説く「種の起源」が刊行されたのは1859年。産業界で激しい競争がくり広げられ、国際間でも帝国主義的拡大と抗争の激しかったこの時代、ダーウィンの進化論仮説は、あたかも真理の如く人々に受け入れられていた。生物進化における生存競争を人間社会に適用して考えたのがスペンサー（Herbert Spencer 1820—1903）の社会進化論（Social Darwinism）である。ロッジにとってダーウィンの進化論を人種や民族にあてはめるのは浪漫派歴史家の洞察を少し体裁づけるものに過ぎなかった⁴²⁾。その点で、パークマンのような浪漫派とスペンサーの社会進化論は共通点があった。

39) *ibid.*, p.15

40) *ibid.*, p.16

41) *ibid.*, p.16

42) *ibid.*, p.16

マッカーレーに関しては、ロッジもルーズベルトも強い影響を受けている。特に文学と政治の結合という点である。ロッジもルーズベルトもペンの人で、政治家でもある。ルーズベルトは「マッカーレーの著作は行動の人に有益だ」と書き、高い理想主義と常識を融合せしめたとした⁴³⁾。ルーズベルトに大きな影響力のあったロッジの育ちや歴史観や国家観、といったものを、要約すると以上のようなものとなる。

ロッジはルーズベルトと同様、政治家であり、ペンの人だった。ウィリアム・C・ウイドナー著「ヘンリー・キャボット・ロッジと米外交政策の追求」に記載されているものだけでも単行本27冊（うち4冊はロッジの編集）、評論59編を数える。また数多くの手紙もあり、ルーズベルトとの間の書簡集（2巻）もある⁴⁴⁾。

(4) アルフレッド・T・マハン海軍大佐

ルーズベルトとロッジが資産家・名家の出身で共にハーバード大学を卒業して、生計を得るための職業に就くことなく政治ポストを歴任したのに対し、マハンは当時、有色人種を除けばアングロサクソン系から最も強い差別を受けていたアイルランド系移民の三世である。

祖父ジョンは19世紀の初めアイルランドからバージニア州に移住した。ジョンには2人の頭のよい息子があった。デニス（1802年生れ）とミロ（1819年生れ）だ。デニスは1824年ウエストポイント（米国陸軍士官学校）を首席で卒業した。校長シルバヌス・セイヤー中佐にその才を愛されフランス留学の後、母校の土木工学（当時のウエストポイントで最重要視された課目）の教授となり、生涯母校に留まった。ミロは少年時より古典ギリシャ語、ラテン語に才能を表わし、古代教会史の権威者となった。

43) *ibid.*, p.17

44) *ibid.*, pp.357-360, p.365

このデニスの長男がアルフレッド・セイヤー・マハンである。母はニューヨークの人。母方の祖父はアングロサクソン、祖母はフランス系ユグノー。マハンの血の半分がアイルランド系、四分の一がアングロサクソン系、四分の一がフランス系だ⁴⁵⁾。

ウエストポイントで生れ、少年時をここで過したマハンは、ニューヨークのミロ叔父宅からコロンビア大学中等部に学んだ。少年向の海洋小説を愛読したマハン少年はアナポリスの海軍兵学校を希望する。ウエストポイントで生涯を軍人教育に捧げた父は息子の性格をよく見抜き、「お前は軍人向きでない。学問の道が向いている」とアナポリス入学に反対した。後にマハン「海軍に入ったことを後悔はしていないが、父のいったことは正しかったと思う」と自叙伝に書いている⁴⁶⁾。

少年時のウエストポイントの校長は南北戦争時に南軍総司令官となるロバート・E・リー大佐であった。バージニア育ちの父は南部への愛着が強かった。小学校時代、奴隷解放論者の教師から「アンクル・トムの小屋」を読むことを奨められ、読んでいると父から取りあげられた。南北戦争が勃発すると、リー校長は南軍に参じた。父は大いに迷ったが、ウエストポイントに留った。南北戦争時の有名な將軍達はほとんど父の教え子だ。マハン生涯父を誇りとした。

ルーズベルトやロッジが早くから文筆の世界で頭角を現わしていったのに比べると、マハン平凡な海軍士官の道を歩んだ。南北戦争には、南部の海上封鎖作戦に参加したが、砲煙の下をくぐったことはない。戦争が終ると、イロコイ号の副長(27歳の少佐)として明治維新直前の日本で2年間を過した。長崎、兵庫(神戸)、横浜、函館といった港を巡り、米外交の尖兵^{せんべい}となって、米国人の生命、財産を守る。いわゆる砲艦外交(gunboat diplomacy)の一翼を荷ったわけだ。日本への往路は大西洋を南下してケープタウンからアデン、シンガポール、香港といった航路をとった。帰途は副長ポストを後任

45) *From Sail to Steam*, p.ix

46) *ibid.*, p.xiv

に譲り、軍服を着ず、民間客船に乗りインド大陸を横断し、開通したばかりのスエズ運河を通り、地中海から欧州、英国を經由して帰国した。航路の要衝は全て英国が握っている。この要衝地に住む文明国人は、赤い軍服の英陸軍によって守られている。政治的に不安定な非文明国に点散するこれらの地に住む白人種の文明は英陸軍によって守られている。

重要航路の安全は勿論、英海軍の手中にある。「大英帝国は日没することなし (British Empire has no sunset.)」、とか「七つの海を支配する (Mistress of the seven seas.)」といった英国による世界秩序を30歳前のマハン少佐は実感した。

この時の経験が後の「一国の繁栄はシー・パワー (海上権力) による所が大きく、国家間の抗争史は制海権の争奪史である」というマハン理論となってゆく源となった。

1884年、ワッチュセッツ号の艦長 (海軍中佐) としてペルー方面駐在時、首都リマの英人クラブで独人歴史家モムセンの「ローマ史」の第二次ポエニ戦役を読んで深く感ずる所があった。

カルタゴの英雄ハンニバルがカルタゴの植民地スペインを出発し、ピレネー山脈、ガリア (現在のフランス) の沼沢地、大河ローヌ河、アルプスといった進軍の困難な地を進んで、軍の兵力を消耗させ、多大の時間を費すという陸路を採らず、地中海の海路をとり、直接イタリア本土に上陸し、その後も母国カルタゴとの間に海路による自由な兵站路があれば、この戦争の様相が大きく変わったのではないか、即ち、地中海の制海権をカルタゴが握っていれば、ハンニバルは第二次ポエニ戦役を容易に勝てたのではないか (実際はカルタゴは敗れている) という考えが頭の中を電光のように走った⁴⁷⁾。

マハンはその頃まで、南北戦争のミシシッピー川流域争奪関連の論文があるくらいの無名の海軍士官だった。

このマハンを新設の海軍大学校のスタッフにならないかとさそったのが、海軍大学校の創設者で初代校長となるステファン・ルース (Stephan B. Luce)

47) *ibid.*, p.277, *Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, p.145

少将である。

講義準備のため一年間の猶予をもらって、主としてニューヨークのアスター記念図書館にこもって資料をあさった。木造帆船と豆鉄砲のような砲で育った自分が、急速に鋼鉄船化と施条巨砲化しつつある近代海軍のために、海軍大学校でどんな意義ある講義ができるだろうか、という^{じくじ}忸怩たる思いがあった。そうして考えた末、次のように腹を決める⁴⁸⁾。

第一に、歴史の歩みに影響を及ぼした、どんな形にせよ海軍力の数多くの影響と、第二に過去250年間の歴史上の海軍史から示される戦いを導く原理・原則を教示しようと考えた。

このようにして作り上げた講義録をまとめ上げたものが列強各国に大きな影響を与えた「海上権力史論」である。

ルーズベルトやロッジが、売れなければ自分で全部買い切れる財力で、著作をどんどん出版した——実際には好評でよく売れ、ベストセラーになったのも多い——のに対し、この本は難産だった。学術的色彩が濃く、どの出版社も二の足を踏んだ。ようやく、ボストンのリトル・ブラウン社が引き受けてくれ、1890年5月定価4ドル(一般の人の平均的給与が一日1ドル弱であった)で出版された。

これが、まず米英で大評判となり、日本はじめ各国ですぐに翻訳された。

本書は1660年から1780年までの英、蘭、仏、西、間の闘争を、海軍、陸軍、外交通商の面から記述し、制海権を握り、重要地点を確得した国が歴史をコントロールしたと論述する。英の西、蘭、仏への行動は全て、このための戦略にそっている。これを可能にしたのは英海軍の力であり、政治家が歴史におけるシー・パワーの役割を正しく理解して、世界最大で最良の海軍を作りあげたからだ。

歴史の示すところによれば、国力、富、国家の威信、安全は巨大なシー・パワーの所持と、その巧みな運用の副産物である⁴⁹⁾。

48) *Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, p.191

Letters and Papers of Alfred Thayer Mahan, vol. II, p.9, Mahan to William H. Henderson May 5, 1890

49) *Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, pp.203-204

ドイツ皇帝ウイヘルム二世は、1894年5月に「マハン大佐の本をむさぼるように読んでいる。そして心底から学ぼうとしている。これは第一級の仕事で、すべての点で古典ともなり得るものだ。余の全ての艦にこの本があり、余の艦長や士官によって、常にこの本が引用されている」といった⁵⁰⁾。

日本の海軍大学校は破格の年俸1万5千ドル（当時の米海軍次官の年俸は4500ドル）を用意し、マハン大佐を招聘しようとしたこともある⁵¹⁾。

マハンは船乗りとして、また武人として特に優れていた人ではない。ただ、この「海上権力史論」の大成功の後には、続々と海軍史関連、海軍軍人の伝記、政治色の濃い外交政策論を、堰を切ったように書き出す。マハンもルーズベルトやロッジと同様にペンの人であった。生涯のペンの量は20冊の単行本、137編の評論や論文、所在がはっきりしている手紙は2900通（1万通の手紙を書いたと思われる）にのぼる⁵²⁾。

ルーズベルトの多弁、快活、男性的、行動的（1分間に50人と握手をした⁵³⁾）、ロッジの、無口、倣岸、冷淡、といった性格と比べると、マハンの特色は孤高⁵⁴⁾と狷介である。それはアナポリスの兵学校時代に、学業の成績優秀にも拘らず大部分の級友から絶交されたという事実からも知られる⁵⁵⁾。

中年以降になっても宏量大度の上官には悦服するが、公務において部下が自分の信条、方針、考えの埒外に出ることに厳しい掣肘^{せいちゆう}を加え、部下の瑕瑾にも厳しいといった剛愎な上官には、激しく反発した。マハンにとって前者は、ルース少将（マハンを海軍大学の教官に招いた）やトレーシー海軍長

50) *ibid.*, p.215

51) 「海軍創設史」篠原宏 リプロポート、1986年、pp.411-412

海軍次官の年俸は *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.560

52) *Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, p.1

53) *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.9

54) マハンの次女エレンの回想によると「My father was essentially “The Cat That Walked By Himself”」「Friends of his own were practically nonexistent」*Letters and Papers of Alfred Thayer Mahan* vol. III, p.721

55) 級友との対立については、*Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, pp.21-24

官（マハンの海大校長時代の海軍長官）であり、後者はフランシス・M・ラムゼー航海局長（航海局は軍務や人事を扱う）やヘンリー・アーベン少将（マハンが欧州派遣艦隊の艦長時代の上官の司令官）だった。ラムゼー航海局長にとって、マハン大佐は、政治的色彩の濃い論文を次々と書くやっかいな海軍大佐で、「海軍士官の仕事は本を書くことではない—It is not the business of a Naval officer to write books—」と嘲った⁵⁶⁾。

また、欧州派遣艦隊司令官として、アーベン少将は部下のマハン艦長の勤務ぶり（艦長室で「ネルソン伝」の執筆に時間を費すことが多かった）に不満で、ラムゼー航海局長宛の人事考課表で艦長職不適の評価を下している⁵⁷⁾。

サラリーマン生活を長らくした人々にとって、上役との関係や人事考課表の持つ意味の重要さはよく分る。ルーズベルトやロッジは若い時より上役に仕えるという苦労はなかった人々だ。マハンは階級の厳しい軍人社会で、宮仕えの哀歓を充分味わった人である。

(5) ルーズベルト、ロッジ、マハンのトリオ

ルーズベルトは自分の政策形成に親しい友人との討議から影響を受けることが多かった。ある考え方について、書簡の往復が盛んに行われた。また、友人が書いた本をもとに意見の交換が繁く行われた⁵⁸⁾。これらの友人の中で、最も信頼を置いた友人がロッジであり、最も大きな影響を受けた友人がマハンであった。また、ルーズベルトはロッジの義弟のブルクス・マダムの著作からの影響も大きかった。例えば、ルーズベルトのアジア問題への取り組みに大きな影響を与えたのが、ブルクス・アダムスの「アメリカの経済的

56) *ibid.*, p.253

57) *ibid.*, p.278, 281

58) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, p.255

優位 (America's Economic Supremacy) 1900」と、マハンの「アジアの問題 (The Problem of Asia), 1900」である。

ルーズベルトとロッジが親しくなった最初は1884年のシカゴで開かれた共和党全国大会だった。

その時、既にロッジは「ジョージ・キャボット伝 (1882年)」「ダニエル・ウェブスター伝 (1883年)」という米国史上著名な人物の一連の伝記と、「米国植民地小史 (1881年)」を書き、ハーバード大学評議員であるとともに、マサチューセッツ州の共和党幹事長をつとめ、連邦議会の下院議員をねらっていた。ルーズベルトは、学者・政治家ロッジを讃め、ロッジはルーズベルトの迫力と生来の政治家としての資質を認める。二人は、貴族趣味、資産家、衣服の好み、自己顕示欲、野心家といった共通のものを持っていた⁵⁹⁾。

ルーズベルトとロッジはきわめて仲が良かった。

ロッジとルーズベルトの緊密さは、時として「ロッジ・ルーズベルト共同会社 (Lodge, Roosevelt and Company)」と揶揄されることもあった⁶⁰⁾。

日露戦争時、講和調停の依頼が日本からあった時、ルーズベルトは国務長官のジョン・ヘイよりも先にこのことをロッジに伝えている⁶¹⁾。

2人には、「米国史からの英雄物語 (Hero Tales from American History) 1903年」という共著もあり、ロッジはルーズベルトの死後、2人の間にかわした書簡書「Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge 1884-1918, 1925」を編集している。

ルーズベルトは大統領になってからも、殆んど全ての重要事項をロッジと討議した⁶²⁾。

ルーズベルトは、自叙伝でロッジについて次のように書いている。

「彼 (ロッジ) は我国の政治家の中で、最も厳密に、最も賢明に我国の外交問題を研究し、外交問題に関わる我国の能力に、米海軍が及ぼす力という

59) *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.260

60) *Henry Cabot Lodge and the Search for an American Foreign Policy*, p.77, p.85

61) *ibid.*, p.129

62) *ibid.*, p.129, *The Letters of Theodore Roosevelt* VI, p.953

重大な事実を誰よりもよく理解していた。国際関係に関する全て、— パナマ問題、海軍問題……ポーツマス講和問題 — に関して私がロッジ上院議員と討議したことは間違いない⁶³⁾」

ルーズベルトの長女アリス（先妻アリスとの間の唯一の子供）の思い出によると、他国の外交官がルーズベルトを訪れ、懸案の外交問題などを尋ねると、「ロッジ上院議員に聞き給え。ロッジほど私の考えをよく知っていて、私の信頼の厚い者はいないよ」とよくいていた⁶⁴⁾。

ロッジも、ルーズベルトがホワイトハウスを去った直後にルーズベルトに手紙を書き、「この25年間、貴下に会わなかったり、貴下から意見を聞かれなかったことが、ほんの数日たりともあったでしょうか⁶⁵⁾」といている。

ルーズベルトとロッジとの関係で重要なことの一つは、ロッジが早くからルーズベルトの将来のキャリアを考え、自身で大統領や国務長官、海軍長官といった高官に働きかけ、ルーズベルトのポストを次々と確保していることである。米国の内閣の高官ポストは、大統領選挙の論巧行賞によって与えられることは今も昔も変りはない。熱血漢で活動家のルーズベルトを大統領選で各地を巡って活躍させる。そうしてロッジ自身は当選した大統領と直談判してルーズベルトのポストを得る。もちろん、大統領が最終目標だ。

1889年ハリソン内閣が発足し、国務長官にジェームス・G・ブレインが任命されると、ロッジはブレインの許を訪れ、次官にルーズベルトをと要請する。

ブレインはその案を採らなかった。

ルーズベルトには「待てしばし」がなく、次官に必要な我慢強さに欠ける。即断即決の恐れがある。そんな賢明で積極的な男にかじ取りをまかせたら、おちおち安眠もできない。関連事項は次から次へと起る。熟慮とかたくなまでの不作為が必要だ。このこととが、かの気質のルーズベルト氏にできると

63) *ibid.*, p.129, *An Autobiography* p.383

64) *ibid.*, p.129, *Henry Cabot Lodge*, William J. Miller, New York 1967, p.9

65) *ibid.*, p.129, *Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge II*, p.337, June 21, 1909

お思いか、というのがブレインの答えだった⁶⁶⁾。

この時、ロッジは直接ハリソン大統領と面談し、然るべきポストをルーズベルトにと頼み、ルーズベルトの了承の下に行政監視委員（年俸3,500ドル）のポストを得ている⁶⁷⁾。

ハリソン大統領の次は民主党のクリーブランド大統領となる。この政変で共和党のルーズベルトは行政監視委員をやめ、ニューヨーク市の公安委員長（Police Commissioner）に移る。

ロッジが本気でルーズベルトを大統領にしようと考え始めたのは、ルーズベルトがニューヨーク市の公安委員長だった1895年頃。

ロッジはルーズベルトが自分にはない「大衆受け（impress the popular imagination）」の才を認め、「君が明日にでも大統領になるべきだとは言わないし、そうなるだろうと思わないが、そうなるかも知れないし、（いずれ）そうなることを確信している」と書いている⁶⁸⁾。

マッキンレー内閣が成をすると、しぶるマッキンレーやロング海軍長官を説いて、海軍次官のポストをルーズベルトにと運動したのはロッジだった⁶⁹⁾。

反対がなかったわけでもない。ある上院議員はルーズベルトをやり手すぎると考えたし、肝心のロング海軍長官も同じような意見だった⁷⁰⁾。ルーズベルトが海軍次官になってすぐ後の米西戦争の結果、比島、グアムが米国の植民地となり、初めて米国は海外に植民地を持つ国となった。従来の国防政策は考え直さねばならない。このためには国民の意識の変更も必要だ。ロッジは、ルーズベルトが陸軍長官（Secretary of War）に向いている、と考えた

66) *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.392, Henry Cabot Lodge, John A. Garraty, Knopf, 1953, p.104,

Power and Responsibility—The Life and Times of Theodore Roosevelt, William H. Harbaugh, Farrar, Straus and Giroux, 1961, p.74

67) *ibid.*, p.392

68) *Henry Cabot Lodge and the Search for an American Foreign Policy*, p.127

Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge I, p.129, Sept.22, 1895

69) *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.559

70) *ibid.*, p.559

こともある⁷¹⁾。

また、ニューヨーク州知事の再選出馬を思い留まらせ、副大統領ポストに就く方が、大統領への早道だとアドバイスしたのもロッジだ⁷²⁾。ロッジは、ルーズベルトを「最も望ましい出来る政治家だ」と考えた⁷³⁾。

1899年7月、ロッジはルーズベルトに、今の自分には2つの望みがあると、次のように書いた。

1つは、米国が世界の列強の中で成功裏に偉大な地位を占めること。

2つは、ルーズベルトを大統領にさせたい、そうしてこれはできると思う。

当時、米国はスペインから奪った新植民地比島での独立運動に手を焼いていた。ゲリラ戦に不慣れの米軍は7万の大軍を投入してもなおジャングル戦の泥沼に陥っていた。

ロッジはルーズベルトを陸軍長官に据えて米陸軍を指揮させ、この戦争を終結させて、国民の英雄になった時点で、大統領選挙に出馬するシナリオを書いていた⁷⁴⁾。

ロッジ・サークルの一員で、ルーズベルトとも親しいブルークス・アダムスは義兄のロッジに次のように書いている。

「(ルーズベルトが大統領になれば) 米国史でのターニング・ポイントとなろうし、その瞬間、米国民は偉大な栄冠を得ることとなろう」⁷⁵⁾

ルーズベルトは、「ロッジは私にとって、個人的にも、政治的にも、その

71) *Henry Cabot Lodge and the Search for an American Foreign Policy*, p.142,

Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge I, p.430, Dec16, 1899

72) *ibid.*, p.127

Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge I, p.404, July 1, 1899

II p.462, Aug.7, 1915

73) *ibid.*, p.127

74) *ibid.*, p.121

Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge I, p.180, Sept.22, 1895

75) *ibid.*, pp.127-128

他全てにおいて、最も親密な人だ」とも書いた⁷⁶⁾。

ロッジとルーズベルトは帝国主義的海外進出ということでは完全に一致していた。

両者を、愛国主義、神秘主義、社会的進化論 (Social Darwinism)、歴史的運命論のまぜ合せだという人もいる⁷⁷⁾。

もっとも、ロッジの帝国主義的進出は、実利主義、折衷主義、機会主義的要素が濃かった⁷⁸⁾。

ルーズベルトにロッジと同様、大きな影響を与えたのはマハンである。2人の間を識者達は次のようにいっている。

「海軍関連の権威者マハンはルーズベルトに大きな影響を与えた」⁷⁹⁾

「この精力的な2人は海軍関係だけでなく、国家のより広い視点でも意見が一致していた。外交政策、海外進出、海軍行政、軍備や平和仲裁問題でも見解はほぼ一致していた」⁸⁰⁾

「(ルーズベルトは海軍行政や外交政策への海軍の利用に関して) 確信的なマハン信奉者だった。」⁸¹⁾

「(ルーズベルトは、海外進出に関して) マハンを自分達のスポークスマンとした」⁸²⁾

ルーズベルトが幼少より海軍に深い関心を持っていたことは前述した。マハンの海軍関連の雷名によって影が薄くなったのであるが、海軍関連の著作

76) *ibid.*, p.88, *Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge I*, p.25, p.280

77) *ibid.*, p.86

78) *ibid.*, p.86

79) *Theodore Roosevelt*, p.120

80) *The Ambiguous Relationship—Theodore Roosevelt and Alfred Thayer Mahan—*, Richard W.Turk, Greenwood Press, 1987, p.1,

81) *ibid.*, p.1

82) *ibid.*, p.1, Mahan と Roosevelt との関係については下書参照

“The Nature of ‘Infulence’: Roosevelt, Mahan, and the Concept of Sea Power”, *American Quarterly* 23, Oct. 1971

活動ではルーズベルトは先輩であった。1881年、22歳のルーズベルトがニューヨーク市のアスター記念図書館を利用して「1812年の海戦史」の資料を集めていた時、40歳のマハン中佐は単行本の一作もない無名の海軍士官だった。2年後に出版された「1812年の海戦史」は名著の評判が高く、何校かの大学でテキストとして使用された。1886年には全米軍艦に一冊が配布される。出版の11年後、英国で公刊英海軍史が企画された時、ルーズベルトは1812年戦争の執筆を公刊史編集長から依頼されている⁸³⁾。

海軍大学校初代校長のルース少将はルーズベルトに、「貴下の本は我校のテキストになるに違いありません」と讚えた⁸⁴⁾。

その後、ルーズベルトは「トーマス・ハート・ベントン伝」(1887年)、「ガバナー・モリス伝」(1888年)、「西部開拓史」(1889年)とやつぎばやに自著を出版する。いずれも好評で、「西部開拓史」はベストセラーになった。前二者には、強力な海軍や、商船の必要性が説かれ、「西部開拓史」にはアングロサクソン世界の拡大が記述されている⁸⁵⁾。

1885年、大部分の時間をマハンはニューヨークのアスター記念図書館で過ごした。「海上権力史論」の執筆のためである。ルーズベルトがこの図書館をよく利用した時から4年間はたっていた。

ルーズベルトは海軍や米国史の著述でマハンの先輩であった。

2人が初めて会ったのはルーズベルトが「1812年の海戦」をノーフォークの海軍大学校で講義した1887年であった⁸⁶⁾。この時、マハンはこの学校のスタッフだった。

1980年5月、マハンの「海上権力史論」が出版、発表されると、ルーズベルトは直ちにこれを求め、週末に読みあげて、マハンに次のような手紙を出している。

83) *The Rise of Theodore Roosevelt*, p.154, p.574

84) *ibid.*, p.574

85) *ibid.*, pp.574-575

86) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, p.22

「この2日間、忙しい小生の時間の半分は貴下の本を読むことに費されました。興味津々であったことは、一気に読みあげたことで知られます。小生が知るこの種の本の中では本書が最も明快且つ有益なものと信じて疑いません。きわめて良書且つ賞讃すべきものであり、必ず海軍関連の古典になることは間違いないと存じます。本書には、出来事の意味と、他のそれとの諸関連を把握し、これの全体状況の中での理解の手腕が示されています。……(1890年5月12日)」⁸⁷⁾

ルーズベルトは「アトランチック・マンスリー」誌(1890年10月号)に書評を書き、2年後に続編(The Influence of Sea Power Upon the French Revolution and Empire 1793-1812)が出版された時にも、同誌1893年4月号に書評を載せている⁸⁸⁾。

マハンが船乗りというよりもペンの人だった。海軍大学校の校長時代、次に予定されている海上勤務を何とか避けたいと希望した。海軍史関係の執筆を望んだのだ。ルーズベルトもその方が海軍全体に有益と考え、ロッジ下院議員(この年上院議員に変わった)、ロッジの岳父のチャールズ・H・デービス海軍少将(ハーバード出身、米海軍の水路地理学に貢献、情報課長、航海局長を歴任)と鳩首会談した。そうして、ルーズベルトは海軍省に出向き、マッカード次官にマハンの要望を伝えている⁸⁹⁾。

結局、ルーズベルトの働きにも拘らず、マハンが欧州派遣艦隊旗艦シカゴ号の艦長の辞令が出る。この艦長時代、狷介なマハン艦長は剛腹の上官アーベン少将と衝突する。アーベン少将はマハン大佐が艦長室での執筆に時間を費し、艦長職務が怠慢と考えたのだ。

アーベン少将によるマハン大佐に関する人事考課表により、マハン大佐が不名誉な人事処遇を受けないよう、今度はロッジ上院議員がハーバート海軍長官に会い、善処を依頼する⁹⁰⁾。

87) *The Ambiguous Relationship—Theodore Roosevelt and Alfred Thayer Mahan—*, p.109

88) *ibid.*, p.16

89) *ibid.*, pp.112-113, Roosevelt to Mahan, May1, 1893

90) *Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, pp.286-287, Lodge は Herbert に会う Feb.10, 1894

ルーズベルトは、外交政策や議会問題に関してはロッジの意見を参考にし、米国の海外進出や外交に不可欠の海軍関連についてはマハンの意見を聞き、併せて、海軍増強の必要性を世論に訴えることにマハンのペンを期待した。マハンが死去すると、直ちにマハンの死を悼む弔文（題名A Great Public Servant）を「アウトルック」誌（1915年1月13日号）に投稿し、次のように書いた⁹¹⁾。

「(マハン大佐は) 米海軍史上の有能な一士官に過ぎない。近代兵器の実際の運用に関してはマハン大佐以上の技能を発揮した士官は少ない。但し、海軍の必要性を一般大衆に啓蒙したことでは大佐は冠絶している。また大佐は国際問題に関して第一級の政治家としての意見を持っていた唯一の偉大な海軍の書き手であった。」

マハンとロッジは個人的に親しく、深い個人的関係を持つ間柄ではなかったが、書信での意見の交流は盛んに行っていた。ロッジはルーズベルトと同様にマハンの考えを評価していた。ロッジはマハンの考えから大きな影響を受けるといっても、思想に共通性があったから、自分の考えの補足としてマハン思想を活用した。強力な海軍の創設問題、ハワイ併合問題など特にそうだった⁹²⁾。

ロッジがルーズベルトとの関係のように、マハンと親密な関係にならなかったのは両者の性格によるものだろう。ルーズベルトが快活な男性的性格で宏量大度にして人の意見をよく聞くタイプであったのに比べ、ロッジもマハンも、狐高狷介で無口な学者タイプである。両者とも容易に心を開かない性格である。

マハンが思想家であり、評論家であるのに対して、ロッジはあくまで権力闘争の過中に身を置く政治家、上院議員だ。マハンが対外面に眼を向けるのに対し、ロッジは国内問題から眼を離せない。理想論のみをいうわけにもい

91) *The Ambiguous Relationship—Theodore Roosevelt and Alfred Thayer Mahan—*, p.2

92) *ibid.*, pp.1-2

かず理想論の限界もわきまえている⁹³⁾。

両者に共通の思想は程度の差こそあれ社会進化論である。

人間社会における生存競争と、それに勝ち残り得る適者の生存だ。特に国際関係における社会進化論の色彩はマハンに色濃い。これは、ロッジの義弟ブルークス・アダムスの思想においても同様のことがいえる⁹⁴⁾。

「現代」を作り上げるのに大きな影響を与えた思想家として、ダーウィン、フロイト、アインシュタイン、マルクス（とレーニン）をあげる人がいる。いずれも影響力の大きかった人々だ。優勝劣敗、適者生存、弱肉強食といったダーウィンの考えを一つの雄大な体系に仕上げたのはハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）で彼の考えは、一般に社会進化論（Social Darwinism）といわれている。ダーウィンとスペンサーの思想は19世紀後半には特に大きな影響力を持っていた。

思想史的な意味での「現代」は欧州において19世紀後半、ダーウィンとスペンサーによって開かれた、という人もいる。

スペンサーの進化論を略述すると、次のようにいえよう。

- (1) 社会は進化する。
- (2) 進化の1段階で均衡状態になる。これは、停退という言葉で表現することもできる。
- (3) この均衡状態の社会に何か強い外力が加わると、その均衡が破れ、その社会は解体の過程に入る。この過程に働く原理が適者生存という進化の法則である。
- (4) 社会には、進化中の社会と、進化のない社会の2つがある⁹⁵⁾。

93) *ibid.*, pp.1-2, *Henry Cabot Lodge and the Search for an American Foreign Policy*, pp.88-89, p.91, p.101

94) *Henry Cabot Lodge and the Search for an American Foreign Policy*, pp.98-101

95) スペンサーの社会進化論に関しては「教養の伝統について」渡部昇一、講談社学術文庫、1977年、pp.23-24, p.30 を参考にした。

(6) ルーズベルトとハワイ・フィリッピン領有問題

白人でハワイ諸島を発見したのはキャプテン・クックで1776年のことである。19世紀になるとこの島に、宣教師や精糖業者が多く住むようになり、その地理的位置から、太平洋航路の要衝になっていった。

特に19世紀の中頃は太平洋での捕鯨が最盛期となり、ジョン・万次郎が捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助されてハワイに着いた1841年には、このハワイ王国のホノルルには各国の船のマストが林立し、米人、欧州人、清国人が商店を開き、ホノルルの戸数は2千を起えていた⁹⁶⁾。

1874年、カラカウア王がハワイ王国の王位についた。王は米人の影響力の増大を恐れ、来日して日本人移民を懇望した。日本人移民の最初は1884年(明治17年)の116名で、2年後には領事を置いた。1890年には日本人移民は1万2千人を超えていた。

1891年、カラカウア王の死去により、リリオカラニ女王が王位を継いだ。女王には子供がなかったので、ハワイ王室は明治天皇に東伏見宮依仁親王(フランスの兵学校を卒業した海軍士官)を養子と望んだが、皇族の外国人との婚儀は先例がない、として実を結ばなかった⁹⁷⁾。

1893年1月、米人派と原住民派の対立が激化し、米人派は駐ハワイの米公使と結んでホノルル停泊の米巡洋艦「ボストン」の海兵隊を上陸させ、女王に退位を迫った。そうして、翌年7月、ハワイ共和国が誕生する。

この革命騒ぎの際には、日本政府は、日本人の生命財産保護のため、軍艦浪速(艦長 東郷平八郎大佐)をハワイに派遣した。

1896年には日本人移民はハワイ原住民3万につぐ2万4千人となり、総人口の4分の1となった。3千人にすぎなかった米人派は米国との合併を主張

96) 「中浜万次郎の生涯」中浜明、富山房、1982年、pp.43-45

97) 皇族の養子の件については「歴史と名将」山梨勝之進 毎日新聞社 1982 p.145

していた。

この時、米政府は海外進出に消極的な民主党(クリーブランド)政権となった。クリーブランドはハワイとの合併をやる意思がなく、ハワイへの不干渉宣言をする。ところが、4年後の1897年、海外進出に積極的な共和党政権(マッキンレー)が誕生し、合併論が再燃してきた。

この1897年には、日本人移民が増えるのを好まぬ米人税関長が、移民船からの移民の上陸をこぼんだ。領事島村久の抗議も聞かぬので、日本政府は再び軍艦浪速(艦長黒岡帯刀大佐)をハワイに派遣した。

この時、駐米公使星亨は大隈重信外相に、「……此際右事件を口実とし、急速に有力の軍艦数艘を派遣し、反報の名を以て同島を占領する時は或は我行為通常示威の区域を超え、日米両国間兵火相見るの不幸に立至り候哉も計り難しと存じ候得共、帝国の断乎たる措置は大に米国政府の反省を促し、米布(ハワイ)合併を未成に防遏^{ぼうあつ}するの結果を見るべきかと存候……(1897年6月19日付)」との信を送った。北方にロシアの現実の恐威を感じていた日本政府(大隈重信外相)は日米関係の悪化を恐れ、星公使の進言を採らなかった⁹⁸⁾。

米国によるハワイ領有を直截的に表明したのはマハンの「ハワイと我が将来のシーパワー(1893年3月)」である。

マハン⁹⁸⁾はハワイの重要性に関して、「ハワイのように中心的位置を占め、しかも広大な洋上において競合する島も代用にもなる島もない唯一の存在をなすという状況は、ただ戦略家のみならず、貿易の指導者の注目をただちにひかないでおかない」「海岸線—海のフロンティア—の攻撃や守備にこれほど重要な要因が(ハワイのような)一地点に集中しているケースは珍しい」「われわれは利己主義が正当な動機であり得ること—事実、正当な動機であることを率直に認めようではないか。……度量の大きな自己利益を堂々と主

98) 日本とハワイとの関係については「星亨」中村菊男 吉川弘文館 1988
pp.165-167, p.170, p.178

張しようではないか」と主張している⁹⁹⁾。マハンと1897年にマッキンレー内閣で海軍次官となったルーズベルトの間ではハワイ領有問題は完全に一致していた。ルーズベルト次官はマハンに次のような書信を送った。「米国によるハワイ領有問題については完全に、実際外交問題全般と同様、貴下の見解と同じです。私の考えはこれらの島々（ハワイ）を明日にでも併合することです。……中米地狭の運河を直ちに建設すべきで、この間12隻の戦艦を建造し、半分は太平洋岸に駐在させるべきです。これらの戦艦は、行動距離の増大のため石炭搭載量を大きくしなくてはなりません。（ハワイ問題に関しては）日本（によるハワイ領有）の危険を非常に感じています。我国へのどんなセンチメンタルな善意にも頼ることなど馬鹿げたことと考えます。……私は（海軍次官として、軍艦2隻を）ハワイへ派遣し、……この島に米国旗を掲げたいと思っています。……日本が2隻の新戦艦（英国で竣工していた）を持つ前に迅速な行動が必要であることを海軍長官に説き、長官を通して大統領に説いています。一日も待てません。一旦、ハワイが我が手に入れば、日本との摩擦という危険はなくなるでしょう。（1897年5月3日付親展¹⁰⁰⁾）」

マハンも次のようにルーズベルト次官に次のように書き送った。

「……もちろん、日本は我々と比べると小さな貧しい国ですが、問題は我々が無気力なため、将来の最も重要な島々（ハワイ）を日本の占有に委ねるかどうかです。（1897年5月1日付¹⁰¹⁾）」

5月6日付では、マハンがルーズベルトに自分は思考の人（man of thought）で行動の人（man of action）ではない。貴下への情報は参考になればよい、思考の人はアイデアを出し、それを実行するのは行動の人（ルーズベルト）

99) "Hawaii and Our Future Sea Power" *The Forum*, 15, March 1893, pp.1-11

「アルフレッド・T・マハン」アメリカ古典文庫8，麻田貞雄・訳・解説，研究社，1980年，p.94, p.97, p.99

100) *The Ambiguous Relationship—Theodore Roosevelt and Alfred Thayer Mahan—*, pp.115-116

101) *ibid.*, pp.114-115

だ、とし、英国の思想家アダム・スミス(思考の人)と政治家ピット(行動の人)の例をあげている。また、4年前に、ハワイ問題は欧州人との問題よりも、モンゴリアン(日本人)との問題だと雑誌に書いたことも知らせている¹⁰²⁾。ルーズベルト次官はマハンに次のような書信を送る。

「……………どんなことでもどんどん書いてきて下さい。私が見落すような多くの点を貴下は気づくでしょうから。……」(1897年5月17日付¹⁰³⁾)

「きわめて注目すべき書信を海軍長官に提出したばかりです。昨日、大統領にはハワイに関して直ちに行動するよう求めました。全く貴下と私との間だけですが、大統領は迅速に行動すると信じています。我国が今ハワイを取るとすれば、我国は日本とのトラブルを避けることとなりましょう。(1897年6月9日付親展¹⁰⁴⁾)

ルーズベルトにとっても、マハンにとっても、米国が海外進出する場合、まず第一に進出して領有すべし、と考えたのはハワイであった。ルーズベルトとマハンの中に頻繁にハワイ問題に関する書信の往復があったことは、このことをよく示している。

日本政府としてはハワイ問題は現状維持を希望していた。急に米国の領土になることは、太平洋のバランスが崩れる。ハワイには多数の日本人が移民として住んでいる。しかし、北方にロシア問題を抱えている日本政府は米国と事を構えることができなかつたことは前述した。結局、ハワイは、ルーズベルトやマハンが強く望んでいた通りに、1898年米国領として併呑されることになる。

この頃、米国とスペインとの間にキューバ問題によって緊張状態が生じた。

スペインとの間がキナ臭くなると、対スペイン戦争を主張するルーズベルト海軍次官は、対スペイン戦争計画案をマハンに送り、そのコメントを求めている。マハン大佐からのコメントを得ると、これを上司のロング海軍長官

102) *ibid.*, pp.117-118

103) *ibid.*, p.118

104) *ibid.*, p.118

に見せ、その後には主要幹部に回覧した¹⁰⁵⁾。

また、ルーズベルト次官はアジア艦隊のデューイ司令官に対スペイン戦争に備え、マニラ湾のスペイン艦隊攻撃準備を命じる。

米西戦争が始まると、ルーズベルトは海軍次官のポストを^{なげう}抛って一陸軍中佐となり、義勇騎兵隊を率いてキューバに渡った。

ロング海軍長官は臨時的組織として海軍司令部 (Naval War Board) を作って、そのメンバーにマハン大佐を入れる。

戦争が始まると、東アジアではマニラ湾海戦、カリブ海ではキューバのサンチャゴ沖海戦によりスペイン艦隊は壊滅する。陸戦でもスペイン軍は振わず敗退する。米軍の損害は軽微で、時のヘイ国務長官は、この戦争を「素晴らしい小戦争 (Splendid little war) と呼んだ。

戦争は米国の勝利に終わった。後は両国による講和交渉である。上院海軍委員会は、海軍側から見た今後の米国の海外拠点問題の答申を海軍長官に求めた。このため、海軍司令部はマハンの執筆した答申書を1898年8月中旬にロング海軍長官に提出した。この答申は、その後の米国の帝国主義的發展に重要なものであり、マハンの思想を知るに重要なものである。

既にこの時点で、ルーズベルトやマハンが熱望していた米国によるハワイ併呑は終わっていた。答申書は37箇条による詳細なもので、簡決に要約すると次のようになる¹⁰⁶⁾。

(1) 米国は戦時において、自由かつ安全に給炭可能な場所が必要なことは明白だ。このためには、米国が優先ないし独占して使用できる地点を割譲その他の方法で確保する必要がある、その国の地方当局との紛争の起きにくい特定の島が都合がよい。

(2) 問題は、政治的に不安定で、合衆国が通商でも多大の関心を持ってい

105) *The Ambiguous Relationship—Theodore Roosevelt and Alfred Thayer Mahan—*, p.123
T. Roosevelt to A. T. Mahan Mar.16, 1898, Mar.21, 1898

106) *Letters and Papers of Alfred Thayer Mahan*, II pp.581-591, 「アルフレッド・マハン」
pp.262-264

る地域である。それは東アジア地域とカリブ海地域だ。だから、東アジア地域とカリブ海地域以外で、米国の優先、独占的給炭地の確保の必要はない。

(3) シナは欧州列強の蚕食が著るしく、シナとの貿易に関して米国は多大の関心を持っている。これらアジア地域の海路的中心はマニラだ。マリアナ諸島のグアム島は良港を持ち、ハワイから3500マイル、ここからマニラまで1500マイルである。早めに巡洋艦を派遣してこの島を詳しく測量すべきだ。

(4) スペインとの和平交渉時には、グアムとマニラないしスービック湾をスペインから割譲させるべきだ。

さらに、マニラからシナへの進出拠点を作るため、マニラから1000マイル、グアムから1600マイルの揚子江河口近くの舟山諸島の一島の確保を進言したい。

(5) ハワイの重要なことは繰り返さない。

この答申書の骨格は、過去の米大陸西進の米国史を、今後は太平洋西進の米国史としようとするものともいえるものであった。海のフロンティア西進の道順ないし布石である。ハワイを併呑し、スペインからグアム島、マニラを割譲させ、更に清国政府に迫って舟山列島の一部を米国の根拠地とする。このように足場を固めた上でシナ大陸へ進む。マハンは戦略拠点としてのマニラ領有を考えたが、マニラのみでの領有には疑問があった。マッキンレー大統領は米軍によるルソン島の獲得を命じた。比島人は政治能力が幼児同然だから、米国が手を引けば内戦と無政府状態を招くのは必至と考えたのである。比島人の独立自治能力を疑問視したのはマッキンレー、ルーズベルト、マハンといった積極派だけでなく、比島領有に反対した米人の大部分もそうであった。比島領有は米国内に大きな論争を巻き起した。その反対論は、海外に植民地を持つことは米国の建国の精神に反する、というのである。

マッキンレーはその後、ルソン島だけでなく、比島諸島全体の領有を決心する。残りの島々を放っておくと、英、独、日といった列強が必ず触手を伸ばし、紛争の種を残すことが懸念されたからだ。1898年12月の米西パリ条約で、グアムと全比島の米国領有がとり決められ、翌年2月、米上院は賛成57、

反対27でこの条約を批准した¹⁰⁷⁾。

ルーズベルトやマハンには比島人には自治能力はないと見た。米人と比島人の関係は、保護者・被保護者、士官と兵、キリスト教伝導者・改修者の関係である¹⁰⁸⁾。それは米人と米原住民（インディアン）との関係と同じであった。

比島人の独立ゲリラ戦に米軍が手を焼いた時、マハンは対インディアン戦争の教訓に学ぶべきだ、とロッジに手紙を書いている¹⁰⁹⁾。

また、ルーズベルト大統領に対しては、油断のできぬ原住民対策には、2万の米軍が必要とも書いた¹¹⁰⁾。

ルーズベルトは外交政策や海軍の組織問題についてはマハンの意見に深く耳を傾けた。ただ、何分老マハンは帆船がようやく蒸気船に移った頃に育った退役士官（1896年大佐で退役）だ。鋼鉄船化され施条巨大砲化した近代艦問題に関しては、若手の現役専門士官（例えばウイリアム・S・シムズ中佐）の意見を聞いた。1906年10月竣工の英戦艦「ドレッドノート」は副砲なしの12インチ砲10門、21ノット、1万8千トンと従来の主砲プラス副砲、18ノット、1万5千トン級と比べ革新的艦であった。

マハンは全巨砲艦タイプの巨艦に反対する論文を多くの雑誌に発表し、ルーズベルトにも長文の手紙を書いている¹¹¹⁾。ルーズベルトはシムズ中佐にマハン論文への反駁論文を書くように命じる¹¹²⁾。マハンは艦の近代化や砲の進歩にはついてゆけなかった。

107) 「アメリカの戦争（世界の戦争8）」猿谷要編，講談社，1985年，pp.278-280，

Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—, pp.416-417

108) *Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, pp.420-421

109) *Letters and Papers of Alfred Thayer Mahan, II*, pp.635-636, Mahan to H. C. Lodge, June 7, 1899

Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—, pp.420-421

110) *Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, p.421

Letters and Papers of Alfred Thayer Mahan, III, pp.6-7, Mahan to T. Roosevelt, Jan.25, 1902.

111) Mahan to Roosevelt *Letters and Papers of Alfred Thayer Mahan, III*, pp.178-180, pp.182-189, Oct.8, 1906, Oct.22, 1906

112) *Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, p.525

(7) ルーズベルトとシナ，日本問題

ルーズベルトは政策形成に際して、親しい人と討議し、書簡の往復を盛んに行ない、著作や論文の批評も互いにし合ったことは前述した。

民主党のクリーブランド時代、クリーブランドの対外政策に不満な人達がルーズベルトの家によく集まった。ロッジやその義弟のブルクス・アダムス、ブルクスの兄でロッジの師のヘンリー・アダムス、ジョン・ヘイといった人々だった¹¹³⁾。現役の海軍士官だったマハンはこの集合には参加することはむずかしかった。これらの人々はルーズベルトが大統領になってからも同様なサークルを作っていた。

1900年、ルーズベルトは二人の親友から新著の贈呈を受けた。ブルクス・アダムスの「米国の経済的優位 (America's Economic Supremacy) 1900」と、マハンの「アジアの問題 (The Problem of Asia) 1900」である。この両書はルーズベルトが翌年大統領になってからのアジア政策に大きな影響を与えた本であった¹¹⁴⁾。

前書の内容は要約すると次のようになる。

- (1) 米国の国力増大に伴い、世界のバランス・オブ・パワーに米国が大きな存在となった。
- (2) 世界の支配的存在だった英国に衰えが見られ、世界の均衡が崩れつつある。
- (3) 将来の世界の紛争は、傾きつつある英国と、上昇しつつあるロシアとの間のものとなろう。不均衡化しつつある世界に強力な経済力を持つ米国は参入せざるを得ない。孤立のリスクは同盟のリスクよりも大きな惨事をもたらす。
- (4) 経済的必要性は、自国の安全のため米英の結合をもたらす。

113) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, pp.22-23

114) *ibid.*, pp.255-256

(5) ロシアやドイツが支配権を握るという危機は差し迫ったものがある。ドイツの経済発展は差し迫った恐威ではあるが、長期的にはロシアの危険が大きい。ロシアは欧・亜に跨がる広大な大陸を有し、しかもこの土地へ他国民が移入するのを排除している。

(6) 世界で決定的に重要な場所はシナだ。

(7) ロシアは蒙昧で創意に乏しく、怠惰で先を考えない。独活^{うど}の大木で鈍重で、社会革命でもない限り、結集がてきない。にも拘らず満州から北シナを併合しようとしている。

(8) 英国が傾きつつあるので、シナでの主な責任は米国にのしかかってくる。このように状況下で、米国は自国の利益のため列強化への方策を求めるべきだ。

ブルークス・アダムスは翌年、ルーズベルトがホワイトハウス入りをした直後、ロッジに、「大統領によくアドバイスし、よく支えるなら、我国の歴史のターニング・ポイントとして、偉大な榮譽を得ることは間違いない。未だかつてどの国もなし得たことのない、世界の支配ができると信ずる…」¹¹⁵⁾と書いた。

大統領に自分の著作の考えをよく理解してもらおうと、ルーズベルトに強い影響力を持つロッジに書簡を送ったのだった。

マハンの「アジアの問題」もブルークス・アダムスのそれと類似している点が多い。

マハンは三年前(1897年)に、雑誌類に発表してきた論文8編をまとめて、「シーパワーとアメリカの利益—現在と将来—(The Interest of America in Sea Power, Present and Future(1897))」を出版していた。それはマハンの対外政策に関する考えを全て網羅したものといってよいものであった。

「シーパワーとアメリカの利益」で、ルーズベルトに影響を与えた外交政策の基本を大観することができ、影響力の大きかった「アジアの問題」でル

115) *ibid.*, p.257, Brooks Adams to Henry C. Lodge Oct.26, 1901

—ズベルトのアジア政策のより深い分析が可能となる。

前書の内容の項目は次のようなものであった¹¹⁶⁾。

- (1) ハワイ合併と海外の海軍用貯炭場の確保
- (2) 英米両国による海上交通路の支配
- (3) 米国への黄色人種移民の危険
- (4) 海外市場への米国の通商拡大の望ましさ。
- (5) 「モンロー主義」の解釈の融通性と、戦争の可能性
- (6) 米国の影響力下の中米地狭運河の必要性
- (7) 英米の人種的同一性と優越性
- (8) 遅れた異教徒を文明化させるためのキリスト教伝導への米国の参加
- (9) 中南米や東アジアへのドイツの進出の恐れ
- (10) 満州や北シナへのロシアの進出の恐れ

後書は、ブルークス・アダムスと同様、ロシアの拡大の恐威と列強による抗争の焦点地がシナとし、要約をすると次のようになる¹¹⁷⁾。

(1) 列強の支配が確立されていない土地 (no mans's land) である北緯30度から40度のペルシヤ、インド、シナ中部で抗争しているのは、不凍港を求めて南下する陸の勢力 (Land Power) のスラブ勢力と、これに対抗する海の勢力 (Sea Power) のチュートン勢力である。

(2) チュートン勢力は、英、米、独、日の四列強だ。四列強はいずれも一国だけでシナを支配することはできず、東シベリア、満州、北シナ、朝鮮へと南下しているスラブ勢力に一国だけでは対抗できない。共同戦線を構築すべきだ。満州はロシアに委ねるが、中部シナの揚子江流域はシーパワー勢力が維持する。(ブルークス・アダムスは日本を信用しなかったが、マハン是人種的にチュートン人ではない日本人をアングロサクソンとの共同ということで方便としてチュートン勢力に入れている¹¹⁸⁾。)

116) Alfred Thayer Mahan—*The Man and His Letters*—, pp.350-351

117) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, pp.257-258

118) *ibid.*, p.258

(3) アジアの諸民族は混迷の将来に無力のまま、外国勢力の下に置かれ続けるだろう。

(4) 揚子江流域は奥地までの水運が可能できわめて重要な地域である。

マハンがシナの自由化や独立については全く念頭に置かなかった。

ブルークス・アダムスの考えはルーズベルトに大きな影響を与えた。大統領として議会への第一回目のメッセージの多くの部分は、この「米国の経済的優位」の焼き直しといってもいいものであった¹¹⁹⁾。実際、ルーズベルトは「私の(議会への)メッセージに関して一度会いたい。貴下の『アトランチック・マンスリー』誌の論文から二点をメッセージに入れようと思っているので」¹²⁰⁾とブルークス・アダムスに書いている。マハンによる満州のロシアに対する揚子江流域の英・米・日の対立という考え方もルーズベルトの思考を整理させた。

ブルークス・アダムスもマハンも世界の紛争の中心地が極東である点は共通している。前者は、この地域の通商から排除される国は民族生命に遅れをとると主張した。

ブルークス・アダムスはいふ。一国が貿易赤字になると、市場を求めて抗争し、ここへ輸出を振り向け、負債をカバーしようとする。東アジアは疑いもなく、工業生産物をはける唯一の地域となっている。故に東アジアは全ての活動的な国にとっての目標となっている¹²¹⁾。

米国の地理的位置、富、エネルギーは東アジアに進出し、この地を米国の経済システムの一部にするのに適している。シナ問題は米国の将来にとって逃げることのできぬ大問題だ。米国がシナ市場を握れなければ米国はばらばらになる。もし握れば偉大な富と力を持つかつての大英帝国、ローマ帝国、

119) *ibid.*, p.191

120) *ibid.*, p.191 Brooks Adams to Henry C. Lodge Sept.27, 1901

121) *ibid.*, pp.178-179

コンスタンチノーブルの如き大帝国となり得る。ブルークス・アダムスは米
国が太平洋一帯を確保し、太平洋が米国の内海となることを夢みた¹²²⁾。

ブルークス・アダムスは1895年出版の「文明と廃退の法則 (Law of Civil-
ization and Decay)」で通商の中心が西へ動いてきたことを指摘した。

人口、通商産業に関する新技術や主要技術の中心が西へ西へと即ち、コン
スタンチノーブル、ベニス、アムステルダム、ロンドンへと移ってきた。こ
れが更に西へ移ってニューヨークとなる。そうして、この運命は米大陸を横
断し、太平洋の西の彼方へ向うだろう¹²³⁾。

1905年、ルーズベルトは、「我国の将来は欧州に面する大西洋岸よりも、
シナに面する太平洋岸によって決まるだろう」¹²⁴⁾と書いた。

マッキンレーとルーズベルトの両内閣で國務長官だったジョン・ヘイも、
「両内閣の外交は主として我国の現在と将来の太平洋地域の利益に向けられ
ていた。この地域は世界の中心的な所であった」¹²⁵⁾と演説している。

なお、ブルークス・アダムスやマハンに共通する大陸国ロシアへの恐怖に
関しては、英人地理学者ハルフォード・J・マッキンダー (Sir Halford J.
Mackinder) の地政学に共通するものがある。マッキンダー仮説は1904年、
王立地理学協会での講演が出発点となっている。ユーラシア大陸の内部地帯
を支配する者が世界全体の運命に重大な影響を与えるだろう、というのが講
演の内容だった。

簡単にいうと、マッキンダーは、現在のロシアや東欧地域をハートランド
と呼び、ハートランドを支配する者は世界島 (ユーラシア大陸とアフリカ大
陸) の運命を決め、世界島を支配する者は全世界に君臨するだろう、という
ものだ。

122) *ibid.*, p.179, *America's Economic Supremacy*, p.29, 43, 51, pp.221-222

123) Brooks Adams の通商の中心が西に移ってきたことに関しては
Encyclopaedia Britannica (1953)(1) pp.151-152

124) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power.*, p.174 T. Roosevelt
to Benjamin I. Wheeler, June 17, 1905

125) *ibid.*, p.174, Michigan, Jackson (July 6, 1904) での演説

マッキンダーは、第一次大戦は、ハートランドを制覇しようとする大陸勢力と、これを制止しようとする海洋勢力の争いと考え、今後、世界平和のためには、ロシア内陸部や東欧地区のハートランドを支配する強力な国家の出現を絶対に許してはならぬ、とした¹²⁶⁾。英米両国人に共通の思想とってよかろう。

ブルクスとヘンリーの両アダムス兄弟以外に、ルーズベルトのシナ情報の源は、駐米独外交官のスペック・フォン・シュテルンブルグと、シナ問題専門家のウィリアム・W・ロックヒルであった¹²⁷⁾。両者ともルーズベルトとうまが合い、前者は駐ペキン独公使だったこともある。

ルーズベルトは前述したように熱血漢だ。また、自分の信条を吐露することに、政治家としては稀なことだが、きわめて正直であった。ワシントン駐在武官の谷口尚真中佐は1908年4月、東郷平八郎軍令部長に、次のようにルーズベルトの人となりを報告している。

「……氏ハ勇邁正ナル大政事家ナルト同時ニ甚タ正直ニシテ、事ニ当テ激シ易ク、時トシテ頗ル神經過敏ナルヲ注意スルヲ要ス…」¹²⁸⁾

ルーズベルトの書簡ないし、演説には、彼の正直な考え方がよく出ている。

ルーズベルトのシナへの感情は軽蔑であった。彼の価値観からいってそれは当然ともいえた。シナ人は文明化と戦闘資質を欠いた遅れた人々である。戦闘資質に関しては、日本人を口を極めて讚美した¹²⁹⁾。シナ人を臆病、不効率・腐敗の典型として、こうあってはならない例として扱った¹³⁰⁾。

シナ軍では欧州軍に対抗できないし、軍人が低く見られている。欧州系のリーダーのみがシナ人を指揮できて侵略に反撃し得る。好戦性と攻撃性に関してシナが文明国の中でルーズベルトが尊敬できるような地位を得、日本の

126) 「地政学入門」曾村保信，中公新書，1988年，p.15, pp.26-34

127) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, p.181

128) 「海軍創設史」篠原宏，リプロポート，1986年，p.505

129) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, p.181

130) *ibid.*, p.182, T. Roosevelt to H. C. Lodge, Apr.29, 1896

例に続くことはないだろう¹³¹⁾。

シナ人は比島人と同様自治の能力はない¹³²⁾。

古代に文明を持ったが、今では劣等民族だ¹³³⁾。ところが、同じ黄色人種でも、日本人はシナ人の弱さと不効率の部分が逆に強力で効率的であるとして讃えた¹³⁴⁾。「日本は血脈においても文化においても、我先祖とは遙かに異なっているが、彼等の遠い先祖の性格と伝統の特色の最も強い部分を保持しながら、西洋の人々に力とリーダーシップをもたらした本質の大部分を完璧に吸収同化した。日本人は何という素晴らしい人々なのだろう。日本人は、恐るべき形態で、偉大な文明列強としての地位を占めるに違いない」¹³⁵⁾

マハンが強い黄禍論者であったのに比べ、ルーズベルトはそれほどでもなかった。日本人を恐れたのは、ドイツやロシアと同様経済的に強力で軍事的に有能なライバルとしてであった¹³⁶⁾。ルーズベルトは米国と深く関わっている黒人、シナ人、比島人といった有色人は能力のなさで恐威とは考えなかった¹³⁷⁾。

ロッジやマハンがそうであったように、ルーズベルトはアングロ・サクソン第一主義であった。最も進んだマングロ・サクソンの文明で遅れた国々を文明化することは、英米にはもちろん文明化される民族にとって望ましいことである。ただ、彼のいうアングロ・サクソンというのははっきり定義されたものではなかった。時には、アングロ・サクソンとドイツ人、ロシア人を区別し、時にはアングロ・サクソンとドイツ人を同人種とした。ある時はアングロ・サクソンとは英語使用民族だった。英人と米人を違う人種の如くに

131) *ibid.*, p.182, Charles H. Person の「National Life and Character」に関する討論
Sewanee Review II (May, 1894), pp.363-364

132) *ibid.*, p.191, *Helena Daily Independent*, Sept.17, 1900 への投稿

133) *ibid.*, p.28

134) *ibid.*, p.29

135) *ibid.*, p.30, T. Roosevelt to Cecil S. Rice, June 16, 1905

136) *ibid.*, p.30

137) *ibid.*, p.31

しゃべったこともある。白人種という言葉も使った。白人種とは欧州で住んだ人々の集団で、ある種の血脈を同じくし、キリスト教を信じ、文化の源流がギリシヤやローマにある人々だ¹³⁸⁾。「アーリア言語はあるが、アーリア人種については疑問だ」としゃべったこともある¹³⁹⁾。黄色人種の米国への移民に関して、「シナ人の存在は白人種に破滅をもたらす」ので米国から排除すべきだとし、賞讃した日本人に対しても米国への流入は許されない、とする。また、ハワイ併合では、これは白人種の利益のためだ、とした¹⁴⁰⁾米国と豪州を東洋人から守って白人のものとしよ、といい、1910年のオックスフォードでの講演では、白人種によって、例のない世界の文明化が行われたと講演した¹⁴¹⁾。

英語国民の拡大は、世界の平和と文明の拡大を意味する、というのがルーズベルトの外交政策を貫く信念であった¹⁴²⁾。

英国のインドとエジプト支配は、英国に利益をもたらしたことは勿論であるが、それ以上にエジプトとインドに益があった。それはエジプトとインドに文明を推し進めたからだ¹⁴³⁾。

英語国民には、男らしさの美学、産業の発展、効率的防衛力、秩序ある政府を作る能力、どこよりも優れた政治機構、個人の自由の尊重、何百年もの間に勝ちとられた種々の自由、といったものがある¹⁴⁴⁾。

列強の東洋進出はこれらの地に文明を及ぼす、というのがルーズベルトの考えであった。比島人やシナ人やインド人といった遅れた人々を文明化させることは人類にとって善である¹⁴⁵⁾。

138) *ibid.*, p.27

139) *ibid.*, p.28

140) *ibid.*, pp.28-29, Charles H. Person の「National Life and Character」に関する討論 *Sewanee Review* II (May, 1894), p.365, *Brooklyn Eagle*, (Nov.18, 1888) への投稿

141) *ibid.*, p.29

142) *ibid.*, p.32

143) *ibid.*, p.32, *Independent* (Dec.21, 1899) への投稿 “Expansion and Peace”

144) *ibid.*, p.33

145) *ibid.*, p.160

「全ての戦争の中で最も正しいものは野蛮人との戦いだ」「ロレーヌ地方がドイツのものになろうと、フランスのものになろうとたいした問題ではない。しかし、アメリカ、オーストラリア、シベリアが、赤や黒や黄色の土着民の手から離れ、世界の有力民族の遺産となることはきわめて重要だ。白人は文明の具現者である」¹⁴⁶⁾。

白人による支配が、遅れた民族をも含めて人類にとって望ましい。「英国がエジプトを支配し、フランスがアルジェリアを、ロシアがトルキスタンを支配することは人間性の面からも偉大な進歩だ。これを瞬時も疑問に思ったことはない」¹⁴⁷⁾

義和団の乱の際、ルーズベルトはこれをシナ人の弱点の現れであるとし、比島人と同様シナ人は西側列強による軍隊の使用によって、野蛮状況から引き揚げねばならぬ、と考えた¹⁴⁸⁾。

ルーズベルトはいう。「我が共和国は太平洋の第一級の列強となった。事態の避けざる進展は我々に比島のコントロールを与えた。それは、神慮によるものといっても不敬ではないだろう」「中米運河の完成は大西洋と太平洋を結びつけ、電信は米国と極東を結びつけ、太平洋航路の蒸気船は増え続けている」。「米国は世界で大きな役割を演じなければならず、そうすべきかどうかという選択の余地はない。運命と事態の進展によるものだ」¹⁴⁹⁾

シナは腐敗と動乱の国だ。日本は列強にその地位を認められ、善悪に拘らず極東に影響力を持つに到った。極東における国際間の威厳は、兵力の配置や行使によってのみ得られる¹⁵⁰⁾。

ルーズベルト・サークルの共通した認識は英国の力の衰えだった。ブルー

146) *ibid.*, p.161, *The Winning of the West* III, pp.128-130, *Washingtonpost* (Jan.19, 1909) への投稿

147) *ibid.*, p.162, T. Roosevelt to Sydney Brooks, Nov.20, 1908, *Washingtonpost* (Jan.19, 1909) への投稿

148) *ibid.*, p.187, *Milwaukee Sentinel* (July18, 1900) への投稿

149) *ibid.*, pp.172-173, *California Address*, p.95, Sanfrancisco での演説 (May13, 1903)

150) *ibid.*, p.173, *California Address* pp.95-98

クス・アダムズは1900年に、ロッジに次のように書いた¹⁵¹⁾。

「英国は悲しむべき状況で、私には特に悲しい。貴下同様、英国の回復を期待するが、それは空しい希望だろう。流れは英国から去りつつある」

ルーズベルトもスペック・フォン・シュテルンブルグに同様のことを書いている。

「悲しいことだが、私の観察と、種々の情報源から聞くことは正確に一致している。」¹⁵²⁾

ロッジも、英国の衰退が米国に幸運をもたらす可能性を考えていた¹⁵³⁾。

ルーズベルトは、ブルクス・アダムズやマハンと同様、極東は、英、日、独との共同でやらねばならぬと考えるようになる。1899年7月にはシュテルンブルグ駐米独公使に、「太平洋は米、英、独が協調して開発すべきだ」と伝えている¹⁵⁴⁾。

ロッジも同様で、「我々は英、日とやってゆかねばならぬ。うまくやってゆけばロシアによるシナ領有を防ぐことができ、シナと我国の通商をオープンにすることができ、これは我々の望むところだ」¹⁵⁵⁾

義和団の乱以降、大企業の顧問弁護士で後に上院議員となるチャーシー・デピューは「(シナ人のような、劣った) 人々は力以外では動かすことができない」¹⁵⁶⁾といった。

ルーズベルトの基本的思想によれば、劣った人種の地域に優れた人種がコントロールを拡げることによって文明が拡大する¹⁵⁷⁾。

151) *ibid.*, p.450, Brooks Adams to H. C. Lodge, Oct.14, 1900

152) *ibid.*, p.450, T. Roosevelt to Speck von Sternburg, Oct.11, 1901

153) *Henry Cabot Lodge and the Search for an American Foreign Policy*, p.158,

Selections from the Correspondence of Theodore Roosevelt and Henry Cabot Lodge I, p.446, Feb.2, 1900

154) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, p.177,

T. Roosevelt to Speck von Sternburg, July12, 1899,

Independent (Dec.21, 1899) への投稿 “Expansion and Peace”

155) *ibid.*, p.185, Henry C. Lodge to H. White, June 26, 1900

156) *ibid.*, p.186, Carnegie Hall での演説 (June 26, 1900)

157) *ibid.*, p.254

「ロシアがアジアに進出することは文明化ということで望ましいが、ロシアがフィンランドを領有することは悲しむべきことだ。(同様に) ドイツが、スイス、オランダ、デンマークへ進出することは望ましくないが、アジア地域へ進出することは望ましい」¹⁵⁸⁾

「シナは非文明国であるから、ロシアの進出は利益になる」。ただし、シナと米国との交易の必要性が大きくなれば、ルーズベルトはこの考えを変えざるを得ない¹⁵⁹⁾。

ルーズベルトによれば、「ロシアは過去において欧州列強の中で唯一、米国と友好的であった。この友好関係は両国の利益からきたことは疑いがない」¹⁶⁰⁾。「ロシア人は全く民主的でない。が甚だ強力だ。故に、シベリアにシナ人が入り込むのを防いでいる (それは望ましい)」¹⁶¹⁾

1898年から99年にかけては、ルーズベルトはロシアを文明化の使者として弁護する態度だった。1900年になって変わってゆくのは、極東でロシアの利益が、英米の利益と衝突するようになったからだった¹⁶²⁾。

以降のルーズベルト政権のあまりにはっきりした反露、親日政策については疑問を持つ人もいた。長らく朝鮮で伝導活動を続け、朝鮮駐在公使だったホーレス・アレン (Horace Allen) もその一人だった。帰国の際、アレンはホワイトハウスでルーズベルトや国務次官のロックヒルと激しいやり合いをしている。アレンは、このような外交政策をとっていると、日本は米国を頼りとしてロシアに対して好戦的態度をとるようになるだろう。好むと好まざるとに拘らず、米国は日英同盟にまき込まれる。もちろん、ルーズベルト、ロックヒルは激しく反論した¹⁶³⁾。

158) *ibid.*, p.262, T. Roosevelt to Frederic R. Coudert, July 3, 1901

159) *ibid.*, p.262

160) *ibid.*, p.260, T. Roosevelt to Charles A. Moore, Feb. 14, 1898

161) *ibid.*, p.260, Charles H. Person の「National Life and Character」に関する討論
Sewanee Review II (Aug., 1894) pp.363-364

162) *ibid.*, pp.261-262

163) *ibid.*, p.199

1905年、ヘイが病死し、国務長官の後釜にはエリーフ・ルートが座った。次官はルーズベルトの古い友人ロックヒルである¹⁶⁴⁾。

ルーズベルトの日本への感情は賞讃と恐れであった。国政の効率の良さ、戦争能力に対する賞讃と、強力な日本との戦争の恐れの間をゆれ動くものであった¹⁶⁵⁾。その点では、日本を貧しい小国と見なし、必要なら明日にでも日本と戦争せよ、と考えたマハンとは大いに異なっていた¹⁶⁶⁾。

ハワイ領有の際は、日本との戦争を心配し戦争になった場合を想定した。

「我々の目標は日本艦隊だ」「決定的要素は制海権であってハワイの陸上兵力ではない」「日本は着実に太平洋での大海軍国となっている。太平洋では日本海軍は我海軍に優っている。我太平洋艦隊は常に日本艦隊を上まわっていないならばならぬ」¹⁶⁷⁾

米国のハワイ併合を日本政府が認めた後は、日本への恐怖は去り、極東での日本の影響力増大は米国の利益に役立つと考えた¹⁶⁸⁾。ルーズベルトが大統領になって直後の義和団の乱による北清事変では、英米日独仏伊露の七ヶ国軍が出兵した。ルーズベルトは入手できる限りの情報で判断した。伊軍と仏軍が最低だった。紀律と戦闘能力の双方とも日本軍が最も優れていた¹⁶⁹⁾。

「(日本人は) 何という生来の戦者なのだろう」¹⁷⁰⁾とシュテルングループ駐米

164) *ibid.*, p.200

165) *ibid.*, p.265

166) *The Ambiguous Relationship—Theodore Roosevelt and Alfred Thayer Mahan—*, p.114
Alfred T. Mahan to T. Roosevelt, May1, 1897,
Letters and Papers of Alfred Thayer Mahan, III, pp.225-226,
Alfred T. Mahan to Bouverie F. Clark, Sept.6, 1907

167) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power.*, p.265, T. Roosevelt to Capt. Caspar F. Goodrich, June 16, 1897,
T. Roosevelt to John D. Long, Sept.30, 1897

168) *ibid.*, p.265

169) *ibid.*, p.265, T. Roosevelt to Cecil S. Rice, Nov.19, 1900

170) *ibid.*, p.265,

T. Roosevelt to Speck von Sternburg, Nov.19, 1900, T. Roosevelt to Cecil S. Rice, Nov.19, 1900

独公使に書くと同時に、「この10数年間で日本は太平洋地域での主導的産業国となろう。日本は軍事面のみならず産業面でも恐るべき国だ。日本の文明はいくつかの重要な面において我々のものとは異なるが、日本は偉大な文明国だ。我々は日本から学ぶ点があり、彼等も我々から学ぶ点がある」¹⁷¹⁾とロッジに自分の考えを伝える。

1904年6月、ルーズベルトは高平小五郎公使、金子堅太郎男爵と会った。そうして双方は次のような話しをした¹⁷²⁾。

(1) 日本が黄海に深い関心を持つのは米国がカリブ海に持つそれと同様だ。

(2) 日本が比島に米国と同等の関心を持って話すのはナンセンスだ。(ルーズベルト)

(3) 満州の将来については、日本としてはロシアの駆逐を考え、清国が満州をコントロールできると考えれば満州を清国に与えるにやぶさかでない。

(日本側)

(4) 満州は列強の保証の下に自治を与えるのが理想だ。

日露戦争が始まり、日本軍の連勝となると、「シナ人を日本人と同じ人種などということは何たる戯言か」「私の日本に関する感情は、日本人は文明世界の人々と全く同等の位置を与えられる素晴らしい文明化された人々だ。

芸術、科学、軍事、産業といった多くの方面で他国から心からなる尊敬を受けている。もちろん、悪い日本人もいる。これは悪い米国人がいるのと同じだ。日本の将軍、提督、政治家、慈善家、芸術家に対して、皮膚の色が異なるとして私が差別しかねないようなことがあれば、不面目なこととして頭を垂れるべきだ」¹⁷³⁾「私は日本人に関心があり、日本人が好きだ」「将来の文明の価値要素として、私は日本人を歓迎したいと思う」「しかし、彼等

171) *ibid.*, p.266, T. Roosevelt to H. C. Lodge, June 16, 1905

172) *ibid.*, pp.266-267, T. Roosevelt to Cecil S. Rice, June 13, 1904,

T. Roosevelt to John A. Hull, Mar. 16, 1905, T. Roosevelt to G. O. Trevelyan, Mar. 9, 1905

173) *ibid.*, pp.268-269

が白色人種に対して偏見と不信頼を持っていないと期待しては駄目だ」¹⁷⁴⁾

1903年、朝鮮問題に詳しいレイ・フントはホワイトハウスでルーズベルトと日露両国の比較を行った。

フントによれば、日本は近代化され、コンパクトで、最新式の機械といていい。政府の財政支出についても正直だ。ロシアはこれらの逆。日本人は「世界一の猛烈な戦士だ (The Japanese are the most dashing fighters in the world.)」ルーズベルトはうなずいた¹⁷⁵⁾。

当然ではあるが、日本が巨大化し過ぎることも困る。

「もし日本が勝てば、スラブだけでなく、我々の全ては東アジアの新しい巨大な強国を認めざるを得なくなる」

「勝利は日本をして東洋の恐るべき強国たらしめるだろう。東洋における他の列強の利益、関心はまとまりがなく、責任は重複しているのに対し、日本の関心、利益、責任は一つにまとまっている。更に、日本がシナの再編成に関わりはじめ (シナへの) の進出をするようになると、白人種の係わっている均衡の中心が移動する」¹⁷⁶⁾

ルーズベルトの考えは、シナに突出した強国が現われないことであり、日本が余りに強くなることは望ましいことではない¹⁷⁷⁾。「二つの強国の力がほぼ同じに留まるのが望ましい。極東でロシアの力が弱まり過ぎることは好ましくない」¹⁷⁸⁾。

日本が朝鮮を獲得することは可能だが、その時でも米国の利権は保証されるべきだ。日本がシナに特別の力を持つことは許されるべきではない。ロシア

174) *ibid.*, p.269, T. Roosevelt to John Hay, Sept. 2, 1904, T. Roosevelt to Dr. David B. Schneder, June 19, 1905, T. Roosevelt to Cecil S. Rice, June 13, 1904, T. Roosevelt to G. O. Trevelyan, May 13, 1904

175) *ibid.*, p.269, T. Roosevelt は Leigh Hunt を May, 1904, June, 1905 の二回 White House へ招いている。

176) *ibid.*, pp.269-270, T. Roosevelt to Cecil S. Rice, May.19, 1904

177) *ibid.*, p.270

178) *ibid.*, p.271, T. Roosevelt to Cecil S. Rice, Mar.19, 1904

が満州に勢力を持つことを米国は認めるが要塞地の旅順はあきらめねばならぬし、満州での自由な通商は認められなければならぬ¹⁷⁹⁾」

米国の比島、シナ政策に欠かせぬものは、キリスト教宣教師団の動きだった。

比島領有を決心したマッキンレー大統領はホワイトハウスを訪れた牧師の一団に、「我々に残された道は、比島全体を併合し、その上で比島人を教育し向上させ、キリスト教に改宗させ……神の恵みによって彼等のために最善を尽すこと以外にないのです」と話している¹⁸⁰⁾。

彼等考えは、「アングロ・サクソンとキリスト教による世界の救済 (The Anglo-Saxon and the World's Redemption)」であった¹⁸¹⁾。

プロテスタント教会の報告によれば1893年にはシナには5万5千人の信者がいたが5年後には5割増の8万人の信者となった。1890年から5年間で1,153人のプロテスタント宣教師関係者が米国からシナへ渡った。

1890年のシナ駐在プロテスタント関係者の集会での米人参加者は230名、英人関係者193名、他国人22名で、米人宣教師関係が断然多かった¹⁸²⁾。

宣教師はシナが、洋式食事、洋服、洋式習慣を取り入れるように、大いに貢献する。米式文明の宣伝者の役目をはたす。シナで長らく住んだ米人宣教師は1890年代に次のようにいっている。

「アメリカン・スチール、スタンダードオイル、ボールドウイン機関車製作所、シンガー・ミシン、といった会社の宣伝方式で、どんなことが最善かと問われれば、(シナでの) 教会に援助をして下さることだ。宣教師達は、意識的にせよ無意識によせ、これら会社の製品の宣伝者であり、教会はこれら会社の宣伝代理店なのだ」

179) *ibid.*, p.271, T. Roosevelt to Speck von Sternburg, May 9, 1904

180) 「アメリカの戦争 (世界の戦争 8)」 pp.305-306

181) *ibid.*, p.255, *The New Empire—An Interpretation of American Expansion 1860-1898*, Walter LaFeber, Cornell University Press, 1963, pp.305-306

182) *ibid.*, pp.306-307

宣教活動は通商活動の尖兵 (Commerce follows the missionary.) であった¹⁸³⁾。

(8) おわりに

世界の通商の中心地は東から西へと移動してきた、といわれる。コンスタンチノーブル、ベニス、アムステルダム、ロンドン、ニューヨークへの移行を見ると確かにその通りだ。米国の歴史も西進の歴史だった。米国が海外進出（太平洋の西進）に本格化するのには、1890年代から1900年代までの20年間である。この間、ハワイ王国を併合し、グアムと比島を植民地化し、更に西に進んでシナ大陸へ向おうとした。この時期米国の積極的な海外進出を推し進めたグループは、ルーズベルト、ロッジ、マハンのトリオであった。この3人は、米国の東アジア政策の創設者といってよかろう。一国の政策の根本となる国の性格は個人のそれと同様一朝一夕にして変わるものではない。と同時にその国策を立案し、実行するのは生身の人間であって、これらキーパーソンの性格を抜きにして、一国の政策理解はむずかしい。スターリン、ヒトラー、チャーチルの性格抜きに、第二次世界大戦前後の、ソ連、独、英の国策は考えられない。その意味で、米国の東アジア政策創設期のキーパーソンといえるルーズベルト、ロッジ、マハンの三者の育ち、性格、思想の考察は米国の東アジア政策理解に不可欠である。

ロッジは歴史学者であると同時に上院議員30年を勤める老獪な政治家で、ストレートな言動はとらないが、ルーズベルト、マハンともに甚だ正直である。米国人の本音を遠慮なく書き、またはしゃべっている。マハンを深く研究した米国留学中の秋山真之大尉（日本海海戦時の東郷大将の参謀）は米国留学中の1899年に「此人（マハン）一定ノ用兵主義ト国家的大野心ヲ抱蔵致

183) *ibid.*, p.307

居レバ、中々以テ油断ノナラナヌ老爺ト小生ハ者破致居候」¹⁸⁴⁾と書いている。ルーズベルトの言動を見れば、米国の意図が明快にあぶり出される。両者と比べるとロッジは直接的ではないが、思想に晦渋はなく、その歴史家としての歴史観から、彼の外交政策思想が自ら浮び上ってくる。

彼等の思想の中心は、英語国民が世界で最も進んだ国民であって、米国流の民主主義思想や、進んだ文明を世界に広めるのは、神の意思であり、明らかな運命だ（マニフェスト・デスティニー）という考えである。この考え方からすると、米原住民、ハワイ原住民、比島人、さらにはシナ人を米国の支配下、影響下に置くことは、原住民、比島人、シナ人にとっても、幸福となることである。

これは、野蛮で遅れた異教徒をキリスト教に改宗させることは神の意思である、というキリスト教宣教師の考えとも共通するものがある。このような考え方は文字通り、神がかり的ともいえようが、これに科学の衣をかぶせるのに便利なものが現れた。ダーウインの進化論だった。

1859年に刊行された「種の起源」は19世紀後半に大きな影響力を各方面に与えた。「適者生存」や「生存競争」による進化といった考えは、産業革命によって産業が急激に拡大し、激しい企業間競争が行われていた時代に、圧倒的な勢いで受け入れられた。国家間でも列強による後進地域の獲得競争がくり広げられていた。

ダーウインの考えを、更に雄大な体系に仕上げたのはハーバード・スペンサーだ。スペンサーの考えは、後に社会進化論（Social Darwinism）と呼ばれるようになった。

個人間、民族間、国家間での生存競争の歴史が人類の歴史である。その時代に適合する個人、民族、国家が残り、他は滅びてゆく。

1880年代から90年代にかけて米国の歴史家は程度の差はあれ、ダーウインやスペンサーからの影響が大きかった。

184) 「アメリカにおける秋山真之(下)」島田謹二、朝日新聞社、1983年、p.159

フレデリック・J・ターナーは、米国史の特色をフロンティア開拓闘争史と考えた。それを更に海上フロンティア進出闘争史にまで拡大したのがマハンだった。マハンの国際関係への視点には色濃いダーウインズムが見られる。ロッジはマハンほどの鮮明さはないが、社会進化論に詳しく、その影響も大きい¹⁸⁵⁾。

このことは、ロッジの師のヘンリー・アダムズ、義弟のブルース・アダムズの両兄弟についても同様だった。両兄弟の兄のチャールス・F・アダムスは鉄道経営の権威者となったが、米国史における鉄道の影響を、「社会進化論」の観点から分析を行っている¹⁸⁶⁾。

ロッジ・サークル（ロッジやアダムズ兄弟）やマハンから影響の大きかったルーズベルトの考えに「適者生存」「生存競争」「停退と進歩」といった要素が強いのは自然であった。ルーズベルトはより直接的に発言し、行動した。遅れた民族を進んだ民族が統治するのは当たり前であり、それは文明の波及という点で、人類にとって望ましい。

停退し、進化が遅れた社会状況にある民族が自治能力を持っていないことも明白な事実である。アメリカ原住民の土地を奪い、彼等を支配することも、「生存競争」による進歩から考えれば当然であり、進んだ文明を享受できるようになる、ということで原住民にとっても良いことなのだ。ルーズベルトやマハンにとって、比島人はアメリカ原住民と変らない。ルーズベルトにとって、シナ人も同様であった。

「マニフェスト・デスティニー」「社会進化論」とならんで、三者に共通するのは黄禍論だ。白人種が最も進んだ人種である、という考えと、黄色人種（日本人やシナ人）の出生率の高さや、勤勉さからくる恐怖とが複雑に交り合った感情は日露戦争後の日本人移民問題で爆発した。黄禍論の先頭に立ったのがマハンである。マハンは「外見がはっきり異なること—明確な人権の相違」、「何千年にもわたる欧米文明と東アジア文明の差」「日本人の強

185) *Henry Cabot Lodge and the Search for an American Foreign Policy*, pp.98-100

186) *Alfred Thayer Mahan—The Man and His Letters—*, p.438

い人種的特色と強力で頑健な性格特性」などをあげ、米国、カナダ、豪州といった白人国への日本人移民の流入に強く反対した¹⁸⁷⁾。

また、三者に共通の考え方は力の信奉である。但し、これは米国に独特なものではない。世界の外交界では古今東西に共通の当り前のことだ。

それをルーズベルトは次のように明らさまにいっただけである。

「太い棍棒を持って静かに話す—Speak softly and carry a big stick—」¹⁸⁸⁾

「必要に応じての太い棍棒は、抽象的な正義のオリーブの小枝よりも強い。米国人は、白人種の任務を背負わねばならない。即ち、偉大さへの義務だ」¹⁸⁹⁾

187) *Letters and Papers of Alfred Thayer Mahan*, III, pp.495-499,

A. T. Mahan to the Editor of *The Times*, June 13, 1913

188) *Theodore Roosevelt*, p.196

189) *Theodore Roosevelt and the Rise of America to the World Power*, p.175